

CoReCa

2019 — 2020

事業報告



CoReCa

2019 - 2020

Contents

2	評議員会長あいさつ
3	理事長あいさつ
4	「外国語学習のめやす」活用の促進 広がる「めやす」の活用
5	学校のソトでうでだめし しょうがないを乗り越えろ！
12	学びの探究とデザイン 教育しか残せない時代に
15	学びの探究とデザイン 探究する学びに踏み出そう
18	日韓の中高生交流 SEOULでダンス・ダンス・ダンス “その先”を広げる力を生み出す
20	ときめき取材記 プロジェクトに取り組む教師のつながり
22	日韓の校長交流 次の交流へと後押し
24	高校生のための隣語講座 ことばへの興味を引き出す
26	日露の教師・生徒交流 育ち広がるネットワーク
28	くりっくにつぼん くりっくにつぼん活用術の実践レポート
29	中国の日本語教育サポート 『好朋友』がめざした学びの実現に向けて
35	TJFを支援してくださっている方々
36	2019年度実施事業一覧
37	組織
38	財団概要

TJFが実施している事業を大まかに四つのカテゴリーに分け、マークで記しました。ウェブサイトで同様のマークが使われています。ぜひウェブサイトもあわせてご覧ください。



学びを深める



きっかけをつくる



つなげる



発信する



人やモノや情報が国や地域を越えていくグローバル社会。日本国内でも、学校で、地域で、職場で、多言語・多文化状況が進んでいます。グローバル化が進展するこれからの時代、子どもたちの活躍の舞台はますます世界に広がっていくでしょう。こんな時代を生きていく子どもたちが自分たちの未来を切り拓いていくために必要な力は何でしょうか。他者と対話する力、共感できる力、異なることば、異なる文化の人びとと協働し、新しい何かを創造する力……。私たちはこれらの力を育むための外国語教育と交流事業を国内外で行っています。

CoReCaとは

人と **Collaboration** 協働 しながら、

Relation 関係 を築いていく。

TJFは人びとをつなぐ

Catalyst 触媒 でありたいと思います。



評議員会長
の ま よ し の ぶ
野間 省伸

この一年、私たちの生活様式は大きく変わりました。例えば、60代・70代のシルバー世代がインターネットのウェブ会議機能を使って孫と会話するなんて、コロナ以前の世界では考えられなかったでしょう。巣こもり生活を強いられただけで、日常生活のデジタル化が急速に加速しました。

私自身、会議のリモート参加が激増していて、iPadに話しかけることにも抵抗がなくなったようです。

先日、これまでは実際に人を集めて行っていたイベントを、ネットを使ったライブ配信で実施してみました。どのくらい参加者が来るか心配していたのですが、やってみると、遠隔地からの参加者も多く大盛況。チャット機能を使って参加者と主催者の双方の会話もできて、デジタル時代ならではの大変有意義なイベントとなりました。

ただし、リアルに行ってきたことをデジタルにただ置き換えるだけでは意味がありません。なぜなら、

若い才能との出会いを楽しみに

リアルな世界とデジタルの世界を単純に比較したら、リアルのほうがいいに決まっているからです。同じ場所にいることで生まれる共感や、触覚や嗅覚で感じるその場の雰囲気。デジタルでは伝えきれない大切なものです。だからこそ、これからのデジタル社会では「リアルでは不可能な体験」を提供することが大きな価値をもつことになると思っています。

デジタルの世界では、若い才能がどんどん育ってきています。いわゆる人工知能（AI）の研究では、世界で引用される注目論文の多くが若手研究者によるもの。デジタルネイティブと呼ばれる若い人たちが、今後どんな成果を上げるのか、とても楽しみです。TJFはこうした若い人たちの新しい発想がもっと豊かになるような体験の場をつくっていききたいと思っています。

皆さまのご協力、ご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

「若い人たちにどんな体験の場をつくっていったらよいだろう」

TJFは実際に会って交流するプログラムをさまざまに展開してまいりましたが、2019年度の終盤から2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により、直接交流を断念しなければならなくなるという事態にみまわれています。どのように工夫すれば事業を継続することができようと思案する日々が続きましたが、インターネットを活用してオンラインで交流するという新たな手法を試みていくところです。

当たり前のように準備していたことが突然できなくなるという体験は、いろいろなことを考えるよい機会ともいえます。2020年夏に初めてオンラインで実施した多言語・多文化パフォーマンス合宿には、日本から9名、韓国、中国、マレーシア、さらに、イギリスからも時差を乗り越えて参加してくれた海外在住の高校生が9名、総勢18名が交流しました。対面

体験をより豊かに

交流とは一味違った環境で、想像力を発揮し協力してユニークな動画作品を仕上げるという大変濃密な時間になりました。

さて、私自身の経験を振り返ってみますと、今から20年前、還暦を過ぎたころ、PCを1台用意され、その操作をすべて自分でやるという状況に置かれることになりました。操作を覚えるまでには、何度も人に聞いたり時間がかりました。しかし、使い始めてみると、国内外のニュースや文献を自由に検索したり、海外にいる友人たちとも直接メールでやりとりできるようになり、PCはすっかり大変便利な道具となり、80歳を過ぎた今でも使い続けています。

世界中の人びとが大きな変化を体験している今、TJFもこれまで以上に創意工夫をこらして、新たな道を開拓していければと思っています。皆さまにはこれまでと同様ご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。



理事長
わ た な べ こ う じ
渡邊 幸治



「外国語学習のめやす」 活用の促進

「外国語学習のめやす」(以下、「めやす」)の活用を促進するために、「めやす」マスターが中心となってセミナーやワークショップを企画・実施し、TJFはそれらをサポートしてきました。2019年度は初めて中国・大連でワークショップが開催され、中

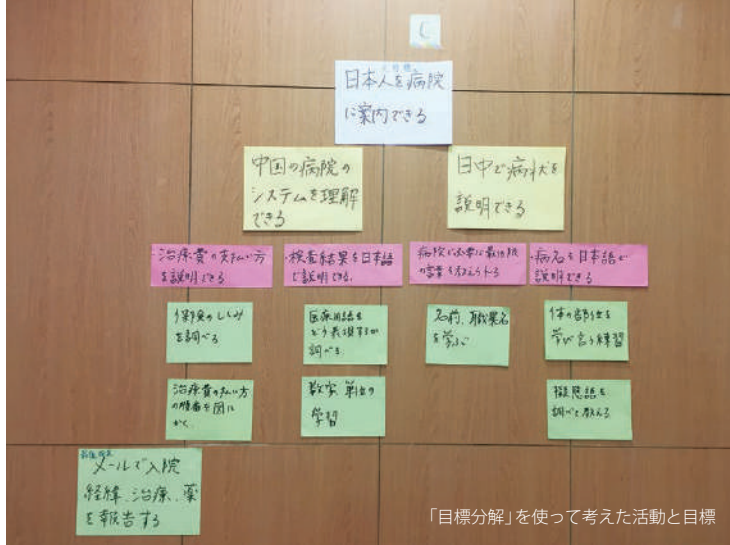
広がる「めやす」の活用

高校、大学などの日本語教師28名が参加しました。ワークショップでは「めやす」マスター研修の主任講師を務めた山崎直樹・関西大学教授が「めやす」の教育理念や目標、内容などについて講演し、「めやす」マスターである植村麻紀子・神田外語大学准教授と阪上彩子・関西学院大学講師がそれぞれ実践報告を行いました。その後グループに分かれ、「めやす」マスターである

田原憲和・立命館大学准教授も加わって、「めやす」の基本コンセプト「3×3+3」と、逆向き設計の授業づくりのために開発された「目標分解」というツールを使ったワークを行いました。目標分解では、学習活動の大目標を設定し、それを中目標、小目標、タスクに細分化していきます。こうすることで一回の授業での目標も、中長期の目標も明確になるのです。そして、そ

れぞれの目標を達成するために、どんな学習内容を盛り込めばいいのか、何をどのように評価したらいいのかも見えてきます。参加者からは目標設定の重要さがわかった、授業づくりについて具体的に考えられてよかった、という声があがりました。

*2013年度から3回実施した「めやす」マスター研修を修了した55名



日本語教育の目標を改めて考えた



韓蘭 (大連理工大学准教授)

特別研究員として京都外国語大学に赴任していた2018年に「外国語学習のめやす」の研修に参加する機会があり、初めて「めやす」の内容について知りました。自分の授業にいかすだけでなく、同僚やほかの大学の先生たちにも知ってもらいたいと思い、「めやす」マスターの方々の協力を得て、帰国後、大連で「めやす」ワークショップを実施しました。

ワークショップで理論と実践報告の両方を聞いたことは大きな意味がありました。実践事例を聞くことで具体的にイメージができ、また自分の実践を理論と照らし合わせて振り返ることもできたのです。大連理工大学では日本語は副専攻として重要な科目になっており、学生に求められる日本語レベルが非常に高いことから、日本語力の向上ばかりに目が向いていました。しかし、「めやす」の教育理念を聞き、日本語教育の目標を見直すきっかけになりました。また、ワークショップでのグループワークで聞いた他大学の先生たちの考えや実践にも刺激をうけました。ワークショップ後も、私たちの授業はどうあるべきか、日本語教育の目標は何かなど、同僚との議論は続きました。

21世紀型スキルや学生たちの人間的成長は、中国の外国語教育でも目標として大きく取り入れられようとしています。「めやす」はこれらの考えが入っており、それらが日本語で書かれている点も日本語教育に携わる者にとってはとても有益です。



外国語学習のめやす

はこちらから

【事業データ】

「外国語学習のめやす」ワークショップ in 大連

期日:2019/8/2(金)、場所:中国・大連、主催:大連理工大学、共催:Let'sめやす、TJF、講師:山崎直樹(関西大学教授)、植村麻紀子(神田外語大学准教授)、阪上彩子(関西学院大学講師)、田原憲和(立命館大学准教授)、参加者:28名

※機関・団体の名称および所属・肩書きは事業実施時のものです。

ものを考える技術 (システム思考)を 体験する

テンダーさんは、環境活動家として、人びとに環境を壊さないように教えるのではなく、ものをつくることで人びとの行動が変わる仕組みづくりに取り組んできました。仕組みをつくるためには、問題の構造がどのようなになっているのかを捉え、どこにどのような働きかけをすれば人びとの行動が変わって環境をよくしていけるのかを考える必要があります。そういうことを考える技術として役に立つのがシステム思考です。問題や状況の背景にどのような要素があり、それらの要素がどう作用しあっているのか。全体の構造を解き明かしただうえ、その構造を効果的に変えるポイントを見つけ、解決を導き出します。環境活動や社会活動、ビジネスなどで取り入れられています。参加した中高生たちは、システムがどのようなものかを理解するワークと、ものごとの構造を明らかにするのに役立つループ図作成を体験しました。



その1

システムを体験する

● システムは動き続ける

グループになる。同じグループのなかから2人を心のなかで選び、その2人と常に1mの距離を取り続ける。1人が動くとき全体が追従して動く。ひとつのパラメータが動くと全体が連動してある一定の均衡を保とうとする状態がシステム。経済や人口の動きもシステムとして捉えられる。



● 個人の能力を問わない

目をつぶってA4の紙をもち、テンダーさんの指示に従う。「半分に折ります」「左上をちぎります」「半分に折ります」「今度は右上をちぎります」……。同じ指示を聞いているのに、できあがった形はバラバラ。指示の出し方が同じなら、誰がやっても結果は同じ。システム思考では、個人の能力や個性、ものごとの善悪には注目せず、「この条件でこういうことをすると、誰がやっても同じような結果になる」と考える。



● 簡単なことも 数が増えるだけで難しくなる

グループになり、相手の名前を呼びながら決まった順番でボールを渡していく。どのグループも難しくこなしていると、テンダーさんがやってきてボールをどんどん追加する。みんな慌てだす。1個なら簡単なことも、数が増えると難しくなる。

● シグナルを無視しない

グループのメンバーの表情をよく見ながら、ボールをまわすスピードを上げていく。忙しくなるとだんだんテンションがあがり、表情も呼吸も変わってくる。そういった状況が発する信号がシグナル。通常は、投げける瞬間に相手の様子から無意識にシグナルを受け取っていて、大変そうなら少し待ったりする。もしそこでシグナルを無視すると、受け取る準備ができていない人にボールが集中してまわせなくなってしまう。いろんなシグナルをなるべく無視せずに捉えて対応する。

● ストレスがかかると難易度があがる

ボールを3個にしてまわす。比較的簡単にこなせる。そこにテンダーさんがやってきてプレッシャーをかける。「はやくしろ！ 遅いっ！ なにぼけっとしてんだよ！」みんな、あたふたし始める。ふだんできることもストレスがかかるとできなくなる。



● あなたもシステムの一部

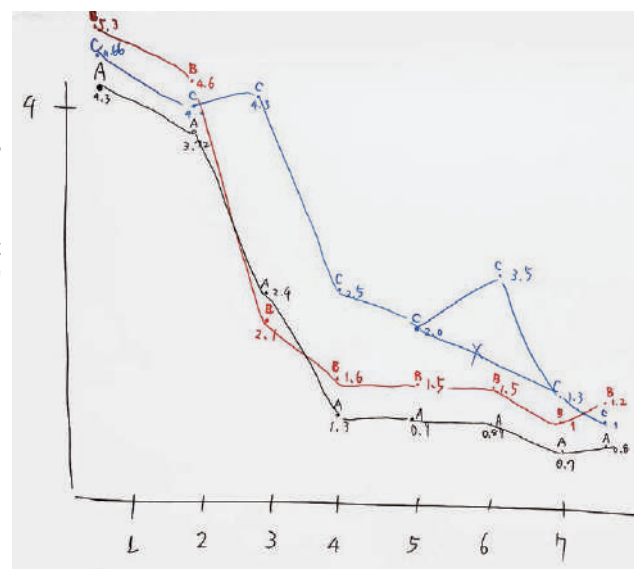
ボールを5つに増やしてまわす。少し忙しい。そこにテンダーさんが順に3つの役に扮して現れる。一人目は仙人。椅子にゆったりと座り、みんなを眺めながら「ホホホホホホ。ホホホホホホ」と悠長な声を発している。ボールをまわすみんなの忙しさは変わらない。次は熱血コーチ。「よしっ！ いいよー！ はいっ、呼吸を合わせてっ。気持ちをとめるなよっーっ！」と気合を入れながら各グループをまわっていく。みんなは困ったような恥ずかしいような表情をしている。最後に現れたのは介入者。「タン、タン、タン、タン……」グループの中に入って、リズムがととのうように手拍子をする。ボールのまわし方に規則性が出てくる。最初の仙人はなんにも変えない。テンダーさん「よくテンダーさんみたいに山暮らししたいですって言われる。でも、多くの人がいう山暮らしは、システムから外れて平和に生きていたいってこと。仙人は高いところから、ホホホホホって言うだけ。システム自体はなんにも変わらない」。熱血コーチは、システムの外から「あーだ、こーだ」と自分の考えを言って



いる人で、やはりシステムは変わりにくい。最後の介入者は、中に入ってみんながペースを合わせられるように手拍子を打った。中に入っていっしょに変化をおこすとシステムに影響を与えやすくなる。システム思考では、「あなたはそのシステムの一部であり、問題の一部である」と考える。

● 指数関数的に増減する

ボールを1個にして、どれだけはやく一巡できるかチャレンジ。タイムの変化をグラフに表すと2次関数のような曲線になった。最初のほうで急速にタイムが縮み、その後変化が緩やかになっている。頭著にタイムが縮んでいるのは、テンダーさんが「小学生が0.6秒のタイムを出した」と伝えた直後。どうやったらはやくできるかという方法はなんにも伝えていない。できそうだと思っただけではなくなった。適切な情報が得られて目的値が設定されると急激に上達する。これに限らず、地球上のあらゆる動きは非直線的で、ある点を越えると指数関数的にいっきに上がったり下がったりする特徴をもっている。



環境活動家のテンダーさんを講師に迎え、中高生向けのワークショップを開催しました。構造を変化させることで問題解決を導き出すシステム思考の考え方と使い方をたっぷり体験する時間になりました。

ワークショップ終了後、プラごみからできたマープルカラーのきれいなビーズやタイルなどの製品をスタッフたちが熱心に眺めるのを横目に、高校生がぼつりとつぶやきました。「作りが知っちゃったから買わない」。親に勧められて参加した中学生は、帰宅後「一生役にたつ内容だった。今まで参加したワークショップはその場だけで終わって感じだったけど、テンダーさんのワークショップは家に帰ってからでもできることだった」と感想を話していたそう。

一生役にたつ内容だった



テンダーさんのお役立ち情報

プラスチックからアクセサリをつくるワーク中には、テンダーさんからさまざまなアドバイスがありました。

おれがおススメするすごい重要なものづくりのルール。1回目から完全な成功を求めない。ボールのワークのときの上述の曲線があったじゃん。最初はとにかく下手でもいいから始めて、ガッと上達したほうがやる前に悩むより早いんだよ。

これはオープンソースだから、世界中のすべての人が自由にやったらいい。みんなアルバイトをやめるんだ！アルバイトは自分で商品をつくれな人がやる手段だからね。自分で売り物をつくれる人はつくって売れば、そのほうがもうかるし、早いよ。

【事業データ】
しょうがないを乗り越える！ 構造を理解し解決を配置するシステム思考実践—ゴミ拾いで稼ぐには
期日：2019/11/9(土)、場所：東京、主催：TJF、講師：テンダーさん（環境活動家、ダイナミックラボ）
参加者：中高校生15名

※機関・団体の名称および所属・肩書きは事業実施時のものです。

「ゴミが他のものと交換できるようになったら、ゴミがお金と同じふるまいをするのね」
「ゴミだから価値がない」と思い込んでしまうのではなく、「材料」だと考えれば、ポリプロピレンやポリエチレンは身のまわりでたくさん手に入ります。
今、テンダーさんは、プラスチックごみからつくった建材をつかって沖繩にドームハウスを建てようと取り組んでいます。すでに、自作のシ

レッダーと押し出し機を使ってペットボトルキャップから住宅用の強度の高い角材をつくれるようになりました。プラスチックが材料なので、水に強くて腐りにくいという利点もあります。さらに、角材の接合部分をつくるための金型を、アルミ缶ゴミを溶かしてつくりと試行錯誤しています。そして、このプロジェクト自体がシステムのデザインされています。というのも、沖繩はプラスチックの海岸漂着ゴミが多く、台風が頻繁

に直撃する場所です。しかし、海岸漂着ゴミから普通の家より台風に強い家を安価でつくれるようになれば、漂着ゴミが価値のある材料になりうるのです。
テンダーさんは、どういう環境にある人も等しく手に入る資源として、日照と雨水とゴミを挙げています。それらをつかって生きていける方法を確立できれば、多くの人にとってお金で問題が解決される世の中よりもやさしい文化が醸成され、かつ環境をよ

ワークショップの詳細はこちらをご覧ください。
<https://www.tjf.or.jp/information/5980/>

テンダーさんの活動の詳細はこちらをご覧ください。
<https://sonohen.life/>

テンダーさん「ペットボトルのキャップを指してこれなに？」
中高校生「ポリエチレン？」
テンダーさん「おー、いい線いってますよ。これはポリプロピレンです。」
プラスチックごみからアクセサリをつくる

ご唱和ください。ポリプロピレン！
中高校生「ポリプロピレン！」
テンダーさん「今日からペットボトルキャップのことをプラスチックと呼ばずにポリプロピレンとお答えください」
プラスチックにはいろいろな種類があります。ペットボトルのラベルの部分はポリスチレン、ボディ部分はPETでできています。ポリプロピレンとポリエチレンは基本的に安全で、燃やすと水と二酸化炭素になります。
熱を加えても安全なポリプロピレンでできているレジ袋を4枚ほど重ねてアイロンをかけてと丈夫な「生地」になります。テンダーさんは、レジ袋やゴミ袋から色鮮やかなバッグやカードケースをつくっています。中高校生たちは「色がきれい！」と驚いていました。
プラスチックについて学びながら、ペットボトルキャップ（ポリプロピレン）を使ったビーズやペンダントなどのアクセサリづくりにもチャレンジしました。ペットボトルキャップを細かく刻んで金属の枠のなかに山盛りにし、クッキングシートを敷いた後アイロンを押しつけて溶かし、最後に



写真提供：Precious Plastic Japan

人々がプラごみやアルミ缶を拾わないのはその必要や理由がないからです。「環境を守るために捨てないでください」と言うのではなく、拾う理由をつくるか、拾う理由をつくるための道具をつくることで、構造が変わってくとテンダーさんは考えています。
テンダーさん「要は、お金がいろいろシステム的重要ポイントに入っている。お金は他のものと交換できるか



テンダーさんは、ペットボトルキャップからピアスをつくったように、ゴミから売れる物をつくることで、人の拳動が変わってくると言います。たとえば、ダイナミックラボではピアスを1500円で販売しています。両耳分のピアスをつくるのにペットボトルキャップが2個必要だそうです。
テンダーさん「もし俺が、ペットボトルキャップ1個1000円で買い取りまっすって言ったらどうする？ まあ、普通、売ろうとか、集めようとかになるわけ」
人がプラごみやアルミ缶を拾わないのはその必要や理由がないからです。「環境を守るために捨てないでください」と言うのではなく、拾う理由をつくるか、拾う理由をつくるための道具をつくることで、構造が変わってくとテンダーさんは考えています。
テンダーさん「要は、お金がいろいろシステム的重要ポイントに入っている。お金は他のものと交換できるか

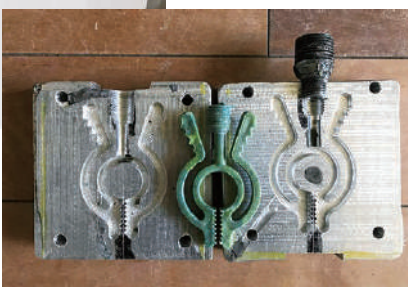
※テンダーさんは、オランダで始まったオープンソースプロジェクト「Precious Plastic」に加わり、その日本版の「Precious Plastic Japan」を運営しています。このプロジェクトに関する権利は、CC BY-SA 4.0 の下、継承されています。



テンダーさん自作の射出成形機。破砕したプラスチックごみを流し込み、溶かして成形する。
写真提供：ダイナミックラボ



アルミごみからつくった金型と、溶かしたプラスチックごみを金型に流し込んでつくった洗濯ばさみ。
写真提供：ダイナミックラボ



活動の拠点は廃校になった小学校を利用したダイナミックラボというファブラボ（市民に開かれた工房）です。ダイナミックラボではアルミ缶やアルミサッシを溶かしてつくった金型に、破砕したプラスチックごみを流し込んで洗濯ばさみやタイルなどの製品をつくっています。金型だけでなく、一連の作業のための機械もラボでつくったものです。
南カリフォルニア沿岸の海底地層を切り出して調べるコアテストでは、1945年以降、マイクロプラスチックの堆積量が15年単位で倍増しており、その大半を繊維が占めているそうです。1万年後の人たちが今の時代の地層を見たらプラスチック

プラスチックの時代

「ゴミからものをつくること」でなにが起きるのか

システム思考応用編

その2

ループ図で構造を明らかにする

●ループ図の書き方と考え方

基本的な書き方：

- ①ある問題や状況について、そこで起こっている要素を思いつく限り書き出しながら、因果関係のある要素を矢印でつないでいく。
- ②因果関係のある二つの要素が、同じ方向に作用する場合は「同」（あるいは「+」）、逆の方向に作用する場合は「逆」（あるいは「-」）と書き込む。

ループ図を書くとき、全体がどのような構造になっているのか、それぞれの要素がどのような連鎖を起こしているのか、自分の認識を明らかにすることができます。
図1では、「人びとがプラごみ（プラスチックごみ）を拾う量」が増えると、プラごみを使った「商品数」が増え、「売上金額」が増える。すると、より性能のいい「加工道具への投資」ができるようになり、道具がそろうと「商品のバリエーション」が増える。商品の種類が増えると、より魅力的な商品写真が撮れるようになるなど「広報力」があがり、「ワークショップ」の依頼が増える。ワークショップ参加者が増えると「マネする人」の数が増え、また「人びとがプラごみを拾う量」が増える。

●構造が見えてから始める

ループ図は、「自分はこういうふうに世界を見ている」ということを人と共有するときに役立つ。同じものでも捉え方は人によって違う。誰かといっしょにイベントをするときには、まずそれぞれループ図を書いてお互いが見たり考えたりしている世界観を共有しておく、その後が楽に進む。
また、ものごとを始める前に多くの可能性を考えておけるので、最初からリスクを減らす対策もできる。例えば

図1で、「マネをする人」が増えて「人びとがプラごみを拾う量」が増えると、素材に対する知識が不足したまま有害物質が発生する塩化ビニルなどを溶かして使う人が出てくる可能性がある。そうすると、具合が悪くなる

人が出てきて（「トラブル」）、プラスチックを溶かしてものをつくるのは危ないという動き（「カウンターメント」）が起きてくると予測がつき、そうならどうするかを考え準備しておくことができる。

●どこに介入するかを考える

問題解決を考える場合は、構造を明らかにしたあと、どこに介入するといちばん小さな力で全体を変えられるかを考える。これをレバレッジ（てこ）と言う。レバレッジを考えるためには、目的がなにかを明確にする必要がある。例えば「学校の忘れ物が多い」という困りごとがあったとする。もし目的が忘れ物をなくすことで「高い評価を維持したい」だったら、忘れ物をゼロにしようとするのではなく、忘れ物のことが取り沙汰されないくらいおもしろい別の取り組みをすることで評価をあげることも考えられる。

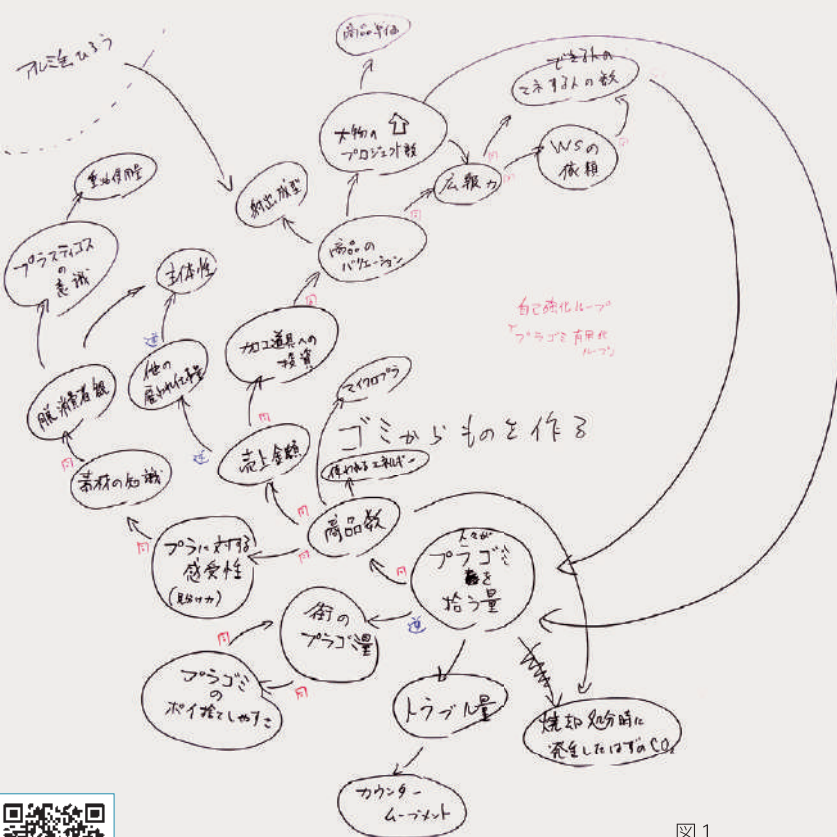


図1
テンダーさんが説明用に書いた「ゴミからものを作る」ループ図



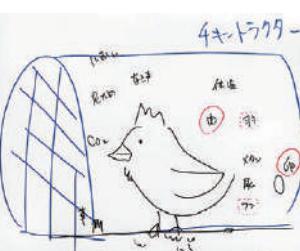
ループ図の詳細は、
<https://www.tjf.or.jp/information/6019/>
をご覧ください

問題を、問題にならないところにシフトする

システム思考には、「作用と副作用を分けない」、そして、「問題は解決できない。その代わり、問題が問題にならないようにシフトさせることはできる」という考え方がある。たとえば、システム思考から派生したバーマカルチャーでは、重力や水や動植物の習性をつかっていかに楽をして身のまわりの問題を解決

していくかというを考える。そのアイデアのひとつが、ニワトリの習性を利用して畑の土をつくるチキントラクター。これは軽くて持ち運べるニワトリ小屋のことで、床はない。チキントラクターを地面に置いてその中でニワトリを飼うと、草をついばみながら、窒素が含まれる尿や糞を出し、羽毛を落とし、

さらには地面を掘り返してくれる。つまりガソリンで動くトラクターを使わなくても、草刈りも、地面を耕すのも肥料やりも、全部ニワトリがやってくれる。そのうえ、卵や肉を得ることもできる。2、3週間して下草がなくなってきたら隣に移し、栄養たっぷりの土壌を広げていく。





教育しか残せない時代

地球環境が限界に達し厳しい未来が予測されるなかで、次世代になにを渡していけるのか。教育にできることはなにか。環境問題解決のため、仕組みや技術の創造に取り組むテンダーさんを講師にお迎えし、教育関係者向けのレクチャー&ワークショップを開催しました。

教える人は変わるのか

テンダーさんは、環境活動家を13年間続けるなかで、「教条では人を変えられない」と考えるようになったそうです。そのきっかけのひとつは、22歳のとき、青森県六ヶ所村で反原発運動に関わり、日本の運動は教えるで人を変えようとすると気づいたことにあります。「原子力発電はリスクが高いから電気をたくさん使うのはよくない」という教えるには同意しても、結局みんな電気を使う。教えるはあるけれど実際にはできていない。それは無視できないことなのではないかと考えるようになりました。

「人の信念を変えることはすごく難しいけれど、人の信念を変えうるものをつくることはできるのではないかとテンダーさんは言います。

「今日、この空間で、座ってくださいって誰にもお願いしてないと思う

の。でも、椅子があつたら座るし、ドアがあつたら開ける。ライトがあつたらつけるのよ。それはすごく簡単な話で、ものがあれば人の行動が変わるということ」

スカスカの地球を渡す

米国のビンガムキャニオンという銅鉱山は、宇宙からも見える大きさだそうです。なぜそこまで掘り進めてしまったのでしょうか。すべての地下資源はベル曲線の形をとるとテンダーさんは説明します。地下資源が役に立つとわかると、掘削技術が上達するので採掘量が急激に増えます。そのまま大量に掘り続けると、効率化のピークを迎え、そこから一気に採掘量が下がります。江戸時代は、銅鉱石を1000kg掘ると20kgの銅が採れました。しかし、現代では2kgしか採れません。残りは屑です。銅を採るた



めにより深く地面を掘ると、鉱石屑の量はどんどん増え、屑の捨て場所が拡大していきます。すると採掘にも鉱石屑の運搬にも燃料と時間がかかり、コストが上がります。そして、どこかで「掘らないほうが得」という日が必ずやってきます。そういう現象を、科学者の故ドネラ・メドウズたちは「成長の限界」と呼びました。現在、地下にある銅の量はベル曲線の終わり近くに

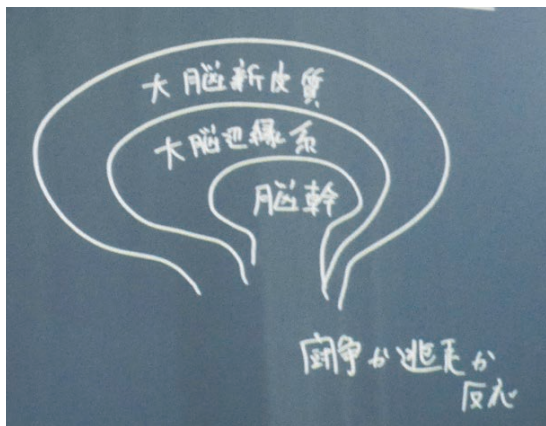
きており、ヨーロッパでは家電から銅を抽出したほうが割安だという状況になっています。

「もうスカスカの地球になりつつある」とテンダーさんは言います。そして、資源を使い尽くしてしまった地球を引き渡していくという状況にあつて、次世代に上から目線で教育するのではなく、「資源が全然なくなつてしまつて本当に申し訳ない。もう考える方法しか残せないから、どうかこれだけは受け取ってほしい」というのが生徒に対する教師の適切な態度なのではないかと参加者に投げかけました。

「闘争か逃走か」になったら論理は働かない

テンダーさんは環境活動家なので、人に話をするときには基本的に「あなたの欲望のどれかをもう少し減らしませんか」と提案するはめになると言います。けれど教えるの成功率の低さも知っている。どうすればいいかと考え、関心をもったのが人の脳の仕組みです。「自分も詳しくないけど、たぶんざっくり理解するので十分実用だからざっくり話します」とテンダーさんが絵を描きながら説明しました。

脳には、脳幹、大脳辺縁系、大脳新皮質の三つの層があります。脳幹は「ワニの脳」と呼ばれる古い脳で、目の前



に敵が現れたときにかみつくか、逃げるかを瞬時に決めます。大脳辺縁系は感情や感覚を、いちばん新しい大脳新皮質は論理的思考などをつかさどります。そして、すべての情報が最初に入るのは脳幹です。なので、脳幹が反応して「闘争か逃走か」の状態になったら、論理をつかさどる大脳新皮質に栄養が送られなくなり、考えたり理解したりすることが難しくなります。つまり、人間は安全と安心が保証されていないと学習にエネルギーを向けることができない生き物なのです。だから、教師が、「お前らこれ知つとかない」とだめだぞ」と権威を見せつけたり、相手を自分に従わせたりする構図をつくつたとたんに、相手はもう平穏な状態ではなくなり、学びづらい環境が

とこのうとテンダーさんは言います。

遊びから学ぶ

テンダーさんは、遊びにも注目しています。心理学者のピーター・グレイは、著書『遊びが学びに欠かせないわけ——自立した学び手を育てる』のなかで、子どもが生存するためにいちばん必要なものが遊びとして採択されているのではないかと書いています。

テンダーさんがサッカー遊びを例に説明しました。1人飛び抜けて上手な子がいて、その子のチームにはどうやっても勝てないとなると、子どもたちが「もうその子1人対21人でもいいじゃん」とルールを変えることがあります。勝つことが目的の競技スポーツの世界ではありえないことですが、遊びの目的は遊ぶことなので、お互いの力が均等で勝つか負けるかわからないのがおもしろい。おもしろく遊ぶ工夫をするなかで、民主主義やコミュニケーション、体の動きなど、さまざまなことを学んでいるのではないかと考えられています。「人間には遊びを通して自己教育する本能があるということだろう」とテンダーさんは考えています。

「安全と安心が保証されていて、楽しい遊びで、自分が心から望んでいると、誰からでもやらされて」いないのに

自己教育が起きてくる。個々の能力の問題ではなくて、環境がとどのついているかどうか。最初に言つたように、教条で人を育むことはできない。それを受け取るかどうかの自由は相手にあるから。でも、自分が自分に教えて自分を育む環境の用意は、周りの大人たちができる。すてきだよね」

学ぶ内容を遊びとして扱う

ゆえに、相手に理解してほしいことを遊びにできるかどうかも重要です。たとえば火起こしだったら、熱力学、摩擦、分子構造や熱崩壊、素材のことで、身体の使い方で、火起こしから派生するすべてを遊びとして楽しみながら学ぶことができます。そういう学びは、「熱力学の単元」「摩擦の単元」のように切り離してしまうと難しくなってしまう。テンダーさんは、「学問は常にこの世界を切りとろうとする。けれど、生きているほうが先だから、現象があつて学問がある」と言います。ほかに、電力自給の仕組みをつくりながら電流や電圧や自分の暮らしに必要なエネルギー量を学ぶ、雨水を生活に利用する雨水タンクをつくりながら水圧やパスカルの原理や光合成、微生物、細菌について学ぶなど、遊びながらいろんな学びを網羅することができます。そういう「生存のた



めのプロセス単位」で学ぶ内容を決めていくと、とても滑らかに学習ができる」とテンダーさんは考えています。

後半は、論より証拠ということ、実際に火起こしを体験しました。まず、テンダーさんがデモンストレーションをします。杉の板にあけた小さな穴にセイタカアワダチソウの茎を差し込み、両手で挟んでゴシゴシと回転させていきます。煙がたち、小さな火のかげらが出てきたら、麻ひもをくしゃくしゃに丸めた火口にそれを移します。この火口で火種を包んでおけば、数時間発火せずに保存できるそうです。ここでテンダーさんが参加者に問いかけました。



学びの探究とデザイン

探究とPBLについての レクチャー

探究もPBLも古典

新学習指導要領で重視される探究学習は新しい概念ではなく、米国の教育学者ジョン・デューイ(1859-1952)が探究のプロセスを研究したのが始まりとされています。1938年発行の『Logic: The Theory of Inquiry』(日本語訳題は『行動の論理学』)で、いわゆる問題状況(何か困った状態、もやもやしている状態など)に対して、仮説を立てたり、説明するための計画を立てたりして実際に検証していく一連の過程が「考える」ということであり、「探究」であると書いています。

日本でも、明治時代にデューイの考え方が入ってきました。大正自由教育や第二次世界大戦後のコア・カリキュラムをはじめとする戦後新教育もその流れをくむものです。2000年頃の「総合的な学習の時間」導入期にも

必要ですか？ 3つあります」

参加者「酸素」もの……

テンダーさん「酸素と温度と燃えるもの。今、足りないものはなんですか？」

参加者「酸素」

テンダーさん「なんで、なんで？」

参加者「酸素が遮られていると思う……」

テンダーさん「理科の先生にたくさん火起こしの説明をしてきたんですけど、燃焼の3原則は知っている。でも、目の前でくすぶる火を見て、今これがないからこうしたいとい経験と結びつけて話せる人はほばいません。それが恥ずかしいとかじゃなくて、お伝えしたいのは、経験から解離した知識と、経験と結びついている

知識と、どっちが生きていくうえで有利かということです」

参加者もチャレンジしますが、なかなか火は起きません。1人だと体力を消耗するので、自然とグループができ、阿吽の呼吸で交代しながら火起こしを続けていました。テンダーさんは、ところどころで、「今足りないものはなに？」「考えて！ 考えて！」と問いかけます。テンダーさんのお手本と自分たちはなにが違うのか考えたり、「ああしたら」「こうしたら」と話し合ったりしながら、1時間近く火起こしに熱中しました。

テンダーさん「別にたくさん論文を読んだとかではなくて、本を読んで勉強する限り、人にはどうやら自己教育の本能があつて、遊んで興味から学ん

サバイバル理科

テンダーさんの

鹿児島の高校での授業です。高校生たちは「生存のためのプロセス単位」でさまざまなことを楽しく体験し、知識や技術を自分の生活に結びつくものとして身につけていきました。

【クリエイティブ腕ずもう】

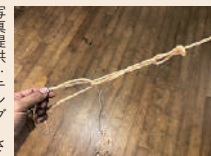
3Dプリンターでつくった人工ひじを装着することで支点をえて、いばん力の弱い子が強い子にどうやったら腕ずもうで勝てるかチャレンジする授業。人工ひじの位置を変えながら勝つ方法を探っていくうちに、支点・力点・作用点の仕組みが感覚的にわかってくるそうです。



写真提供：ダイナミックラボ

【ロープワーク】

理科の先生でも生活に身近な人はあまりいない「動滑車の原理」。それを日常で目にする形としてテンダーさんが考えたのがロープワーク。動滑車は「少ない力で軽く動かす。その代わり、動かす距離が増える」ということだとテンダーさん。今回のワークショップでも、ホームセンターで安く手に入るロープを使い、会場でいちばん重い机を南京結びで持ち上げる実験をしました。



写真提供：テンダーさん

テンダーさんのレクチャーとワークの詳細や高校の授業「サバイバル理科」での実践はこちらをご覧ください。
<https://www.tjf.or.jp/information/6181/>



テンダーさんの活動の詳細はこちらをご覧ください。
<https://sonohen.life/>



【事業データ】

教育しか残せない時代に一知識と実体験を融合する 鹿児島「サバイバル理科」の取り組み
期日：2019/11/10(日)、場所：東京、講師：テンダーさん(環境活動家、ダイナミックラボ運営)、参加者：小中高の教員、教員志望の学生、教育関係者など36名

※機関・団体の名称および所属・肩書きは事業実施時のものです。

探究する学びに 踏み出そう

デューイの思想が盛んに取り上げられました。

一方、プロジェクト型学習(以下、PBL。Project Based Learningの略)は、デューイの弟子のウィリアム・ヒアド・キルパトリック(1871-1965)が「学習者が明確な目的を

講師の稲垣忠・東北学院大学教授による探究とプロジェクト型学習についてのレクチャー、小中高の先生方による実践報告、そして探究する学びをデザインするワークショップを2020年3月に実施しました。新型コロナウイルスの感染拡大のため急きょオンラインでの開催となりましたが、一斉休校への対応に迫られるなか全国から約30名の参加がありました。

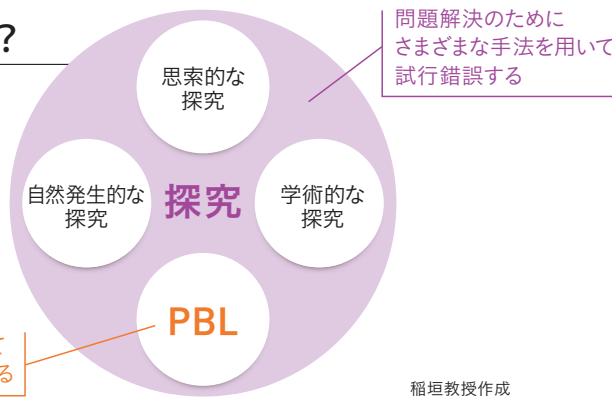
今なぜ探究とPBL？

デューイによる探究の概念やキルパトリックによるプロジェクト・メソッドが生まれたのは、第一次・第二次世界大戦や世界恐慌がおこるなど不安定な時代でした。現代社会を考えると、その特徴を表すキーワードとして、よくVUCAが挙げられます(上の囲み参照)。つまり、これから世の中がどうなるか予測しにくい時代になったということです。そういうなかで、デューイの頃と同じように「自分で考えることが大事だ」といわれるようになってきました。

PBLは探究のバリエーションのひとつ

探究が、デューイのいうように問題状況に対して試行錯誤することだとすると、下図のように四つの領域に分

探究とPBLはどんな関係？



稲垣教授作成

学習者および社会にとって
意味のある問題解決をする

けられます。課題解決型の学習であるPBLは探究のひとつであり、学習者にとって意味のある目的や社会にとって意味のある問題を設定するという特徴をもちます。

昨今、PBLと同義であると誤解されがちなSTEMあるいはSTEAMは、問題解決の題材やプロセスに科学や工学、芸術などを持ち込むことです。学び方というより、学ぶ題材や内容を指し、その学習方法としてPBLが採用されることが多いということです。

・STEAM: Science, Technology, Engineering, Mathematicsを指し、STEMにArtsを加えたもの。
稲垣教授のレクチャーの詳細は以下のページをご覧ください。
<https://www.tif.or.jp/information/5856/>



PBLの実践報告―生徒の切実感を生んだ資料

小中高校の先生方8人が、技術、社会、数学、保健体育、理科のプロジェクトでの試行錯誤とその成果について報告しました。富士見中学校高等学校の三浦佳奈・社会科学教諭と宗愛子・専任司書教諭は、高校2年生の現代社会の「平等権の保障」の単元でプロジェクトを実施。ミッションは「富士見 Diversity Weekを開催しよう!」。アイヌ、在日コリアン、障がい者、同和地

区出身者、LGBTQ、無戸籍者など、グループでテーマを選び、マイノリティーをめぐる社会の課題についてリサーチし、そこで明らかになったことを、中高生が読みたいと思える「コトバカード」に表現して校内に展示しました。

プロジェクトに取り組む生徒の熱量は高く、毎回授業の最後に書く振り返りを、チャイムがなっても書き続けていたそうです。三浦先生は、「マイノリティーの存在は知っていたものの、その人たちが具体的にこんなふうに困っているのかとか、自分たちも知らずに傷つけてしまっていたんじゃないかなど、ハッとさせられるような資料がたくさんあった。意図せず加害の側に立っている可能性があると感じて、どうしたらいいんだろうと本気で試行錯誤するようになった」と話しました。宗先生は、「ねらいに沿った資料を探せたのは、三浦先生といっしょに授業をつくっていったことが大きい」と言います。生徒のふだんの様子から、新聞やウェブ記事なども含めてどういう内容の資料を用意するといいか、三浦先生といっしょに考えたそうです。

富士見中学校高等学校の実践報告の詳細は以下のページをご覧ください。
<https://www.tif.or.jp/information/5886/>



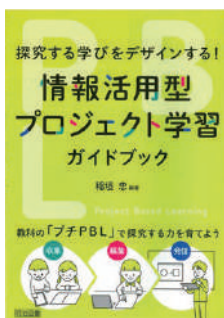
探究する学びをデザインするワークショップ

最後に参加者が、情報活用型PBLの手法を使って、担当教科の単元を探究的な学びにデザインするワークに取り組みました。単元のミッションと期待する成果物を決めた後、情報活用の収集・編集・発信の3ステップを26種類の活動に落とし込んだ学習活動カードを並べながら、子どもの目線になって探究の道のりをシミュレーションします。そこで描き出された子どもの探究のプロセスを支えるにはどういふスキル(情報活用能力)が必要かを検討し、さらに各活動

の詳細や時間配分などを考えて単元のデザインを完成させました。

参加した高校の先生はアンケートに、「探究を内実あるものにするために教科指導の発展型として探究活動を位置づけられないかと考えていた。教科指導に探究活動を取り入れる今回のワークショップはタイムリーで、理念的裏付けにもとづいて具体的な方法が示されていたのもよかった」と感想を書いていました。

情報活用型プロジェクト学習の考え方やデザインの手順は、『探究する学びをデザインする! 情報活用型プロジェクト学習ガイドブック』(稲垣忠編著、明治図書)に詳しくまとめられています。今回実践報告をしてくださった先生方の取り組みも掲載されています。

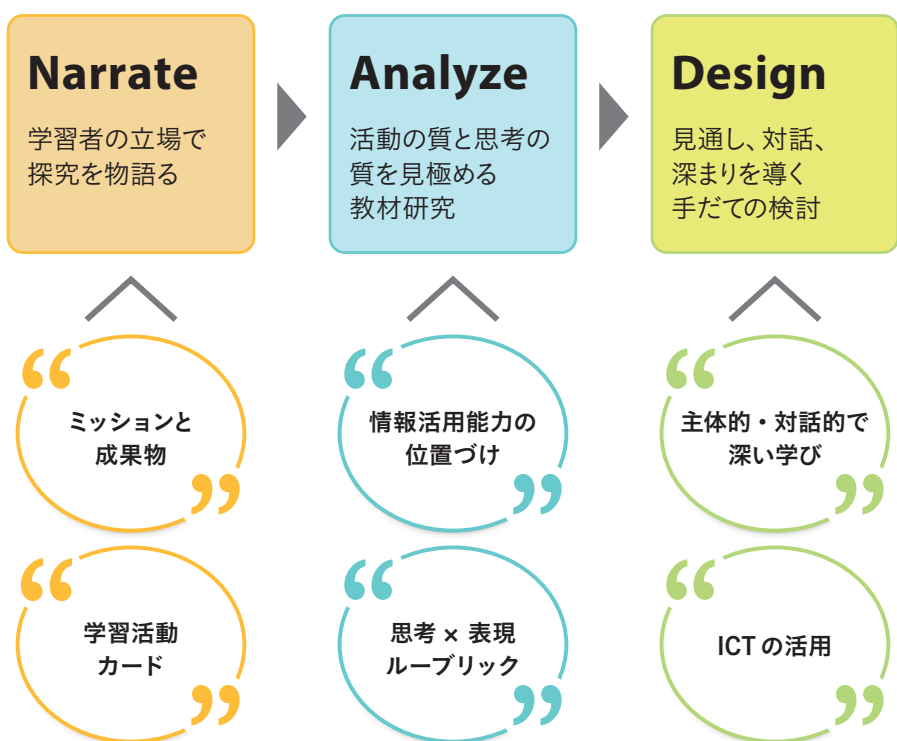


情報活用型PBLの考え方、手法、学習活動カードやデザインシート等は、稲垣教授のウェブサイトをご覧ください。

<http://ina-lab.net/special/joker/pbl/>



情報活用型PBLをデザインする手順



【事業データ】

「探究する学び」あれこれ相談☆オンラインカフェ
期日：2019/8/19(月)、場所：オンライン、主催：TJF、アドバイザー：稲垣忠(東北学院大学教授)、参加者：小中高校の教員9名

探究する学びに踏み出そうー実践の分析とデザイン

期日：2020/3/15(日)、場所：オンライン、主催：探究スキル研究プロジェクト、TJF、助成：JSPS 科研費19K03009、講師：稲垣忠(東北学院大学教授)、アドバイザー：稲原教子(元アメリカンスクールインジャパン教諭)、参加者：小中高校の教員、レクチャー29名、ワークショップ18名

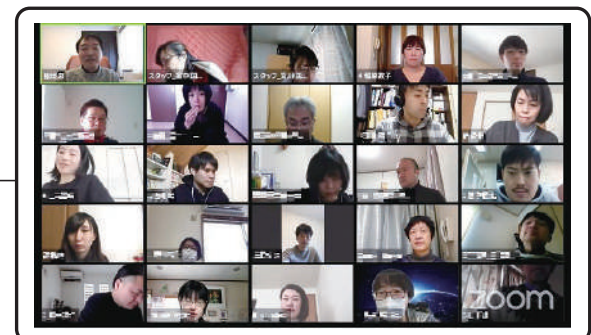
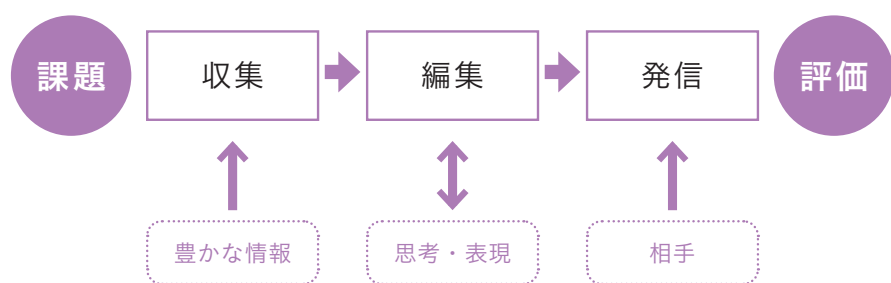
※機関・団体の名称および所属・肩書きは事業実施時のものです。

情報活用型PBLとは

「子どもたちが主体的に情報を集め、吟味し、じっくり考えて編集、創造し、切実感をもって他者と伝え合う学び」のこと。稲垣教授が考案した。「教科の1単元をもとにPBLを展開する」「探究のプロセスや教科の学びの質を学習者目線で捉える」「探究を支える情報活用能力を育てる」という3つの特徴がある。情報活用能力とは、コンピュータやプログラミングの知識やスキルだけでなく、さまざまな情報を集め、集めた情報から意味を見いだしたり、あらたな表現をつくりだしていく力のこと。

【情報活用型PBLの基本的な流れ】

プロジェクトのミッション





日韓の中高生交流 SEOULで ダンス・ダンス・ダンス

“その先”を広げる力を生み出す

日韓の中高生が5日間共同生活を行い、発表会でK-POPダンスを披露する「SEOULでダンス・ダンス・ダンス」(以下、DDD)には例年、日韓ともに全国から多くの応募があります。日本の参加者の応募理由に多いのは「K-POPが好き」「ダンスが好き」「韓国語を話したい」「韓国の中高生と友だちになりたい」などです。

プログラム名どおり、この交流はダンスをテーマとしていますが、上手に踊ることだけが目標ではありません。さまざまな「得意」や「興味」をもって、いる中高生が集まることで、互いの個性の違いに気づき、チームロゴ制作、衣装準備、ダンス練習などの活動で、それぞれの良さを発揮することをねらいとしています。舞台上でダンスを発表するというゴールに向けて、意見がぶつかって衝突したり、思うように気持ちを伝えられずに歯がゆい思いをしたりしながらも、自分で、または仲間の力を借りて、何らかの解決法を見つけていきます。

発表会では6チームそれぞれが、自

分たちで選んだ衣装をまとい、自分たちでつくったロゴが大きく映し出されたスクリーンの前で、ダンスを披露。観客の投票により、優勝チームと入賞2チームが選ばれました。

先輩たちの話を聞く

2019年度は新たな試みとして、このプログラムのOBOG4人をスタッフに加えました。自分たちの体験をもとに参加者に寄り添い、見守る役割を担うと同時に、DDD参加後からこれまでどのような進路を選んできたか、DDDは自分にとってどんな意味があったかなどを参加者に伝えました。韓国の大学に進学したり、プロのダンサーになったりと、さまざまな道を歩むOBOGの話は、参加者にとってこれからは考えられないような刺激となったようでした。

DDD参加で

得たものの深まったもの



特徴・違いに興味関心をもつ

互いの文化や、意見の出し方、配慮の仕方、人との距離の取り方や接し方など、さまざまな特徴や違いに気づき、一緒に何かをすることへの興味関心が広がった。



韓国語／日本語をさらに学びたい

伝えたいことがうまく伝えられない経験をする中で、韓国語／日本語を学びたい、という思いが強くなった。

相手を理解しようとする

自分とは違う相手とのコミュニケーションには時間がかかる。それでも目標達成のためにしっかりと向き合うしかない。



この先進む道を思い描く

OBOGの進路や体験談に、熱心に耳を傾ける。年が近いOBOGの話から、この先進む道のイメージをふくらませた。



SEOULで
ダンス・ダンス・ダンス
はこちらから

多様性をカにやり抜く

ダンス、韓国語／日本語、ファッション、音楽の編集、デザイン、チームをまとめることなど、それぞれの得意なことを出し合いながら、仲間と力を合わせて練習し、舞台での発表をやり遂げた。



自分の意見を伝える

勇気をもって意見を伝えなければ、誰かと何かを一緒につくことはできない。遠慮がちな参加者も自分の意見を伝えるようになった。



友情が芽生える

別れのときには、バスの出発時刻を過ぎても離れられない参加者も。プログラム後もSNSを活用しながら交流は続く。



写真はすべて©但馬一憲

【事業データ】

日韓のこばを学ぶ中高生交流プログラム「SEOULでダンス・ダンス・ダンス2019」
期間：2019/ 8/14(水)～19(月)、場所：韓国・ソウル、企画・主催：(財)秀林文化財団、TJF、実施：秀林外語専門学校、韓国日本語教育研究会、TJF、助成：(公財)日韓文化交流基金、協力：高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク(UAKEHS)、輸送協力：ANA、後援：国際交流基金ソウル日本文化センター、旅行取扱：(株)HANATOUR JAPAN、参加者：韓国語を学ぶ日本の中高生20名、日本語を学ぶ韓国の中高生18名、コーディネーター：1名、引率教師：5名(看護師1名含む)

※機関・団体の名称および所属・肩書きは事業実施時のものです。

思い切って飛び込む ことで「広がる」 ことを知った



平野 美優
2019年度参加者

DDDへの応募は、私の人生で初めての思い切った挑戦でした。学校でも独学でも韓国語を勉強していますが、交流プログラムに参加したことはありませんでした。DDDに参加した人を知っていたわけでもなく、友人と一緒に応募したわけでもなく、不安な気持ちで参加しました。でも、思った以上に自分の韓国語が伝わって、「上手だね」とほめてもらえたり、ダンスでもうまく踊れない子を手助けすることができたりして、達成感を得られました。そして何より、新たな出会いがあり、つながりができたことがうれしかったです。

特に、過去にDDDに参加した先輩方との出会いは、私に大きな影響を与えました。韓国でダンサーとして活躍している先輩の話からは、頑張れば厳しい道でも開けるという勇気ももらいました。韓国の大学に進学した先輩には、韓国留学の

メリットやデメリットについて聞き、アドバイスをもらいました。そして、日本の大学に通いながら、日韓交流団体に活動している先輩には、視野を広げることの大切さを教えてもらいました。この先輩の話に感銘をうけて、プログラム終了後、私もその団体に入って一緒に活動するようになりました。参加前の自分からは考えられないぐらい、自分の活動範囲が大きくなっているのを感じています。

DDDを通して私は、勇気を出して新しい世界に飛び込んでみることで、人脈も可能性も広がることを学びました。この先は日本の大学に進学し、韓国への交換留学をめざすことにしましたが、大学で、同じような夢や目標をもつ人と出会うことで、自分の世界はさらに広がると思います。今はそれが楽しみです。ゆくゆくは、DDDのようなプログラムの企画や運営ができたらと考えています。

プロジェクトに取り組む 教師のつながり

大学や日本語学校などで学ぶ学生が、自分の興味のあるテーマに関わる人にインタビューをして記事にまとめ、TJFのウェブサイトで発信する「ときめき取材記」プロジェクトは2016年度に始まりました。2020年12月末までに延べ30校の学校で取り組み、66本の記事がウェブサイトに掲載されています。

このプロジェクトは、学生がインタビューを探すことに始まり、依頼、インタビュー、原稿作成、写真撮影など多くの工程があります。そのため、限られたコマ数でどうこなすか、教師がどこまで手や口を出すか、協力先とトラブルになった場合はどうするか等、悩みや課題を抱えることが多いようです。そこでTJFでは、悩みや課題、その解決方法や役立つ情報を共有し、インタビューを深めるために資料を提供するほか、勉強の場もついています。

2019年度は、プロジェクトを広げ、活動をより深めるために、実践している教師と検討中の教師を対象

に1泊2日の「実践ワークショップ」を実施しました。1日目は、聞き書きの名手である塩野米松氏が「聞き書きとは何か、いい質問とは」をテーマに参加者の質問に答えるという形で講義を行いました。その後プロカメラマンの中西祐介氏が「インタビュー記事に必要な写真」について自分の経験を交えて話をするとともに、実際にとき

めき取材記ウェブサイトに掲載されている写真を例に、課題と改善点を解説しました。2日目はプロジェクトを実践中の4名から実践報告がありました。失敗も含めて情報共有がされたことで、実践を検討中の参加者にも活動がイメージしやすくなったと同時に励ましにもなったようです。

2018年度から留学生のクラスで「ときめき取材記」プロジェクトに取り組んでいますが、2年目で掲載にこぎつけることができました。

1日目は、最初にテーマを立て、それに沿ってインタビューする人考えました。しかし学生の興味の対象が日本の伝統行事などに集中しがちだったこと、そして、ネット検索に頼りがちだったことで、インタビューする「人」にフォーカスしきれませんでした。また、各工程にかかる時間をうまく調整できず、ほとんどの学生が最後までやり遂げることができませんでした。どうしたらうまくいくのだろう、と思っていたところで、ワークショップに参加。他校の先生からさまざまな失敗談を聞いて、試行錯誤しながら進めていいんだ、と勇気が出ました。また、各工程にどの程度時間をかけたか具体的な流れが聞けたことも参考になりました。

そして2年目、興味がある「人」を先に決めて、その後テーマを考えることにしました。学生の視点が「人」にいくようになり、インタビューが進めやすくなったようでした。取材協力を断られてしまったり、文字起こしに時間がかかり過ぎてしまったり、いくつか想定外のことは起こりましたが、無事原稿がウェブサイトに掲載され、学生たちの達成感は大きかったようです。

同じプロジェクトに取り組んではいても、対象、授業の枠組みなどは学校によってさまざまで、確実にうまくいく、という正解の進め方はありません。私の場合、ワークショップでそれに気が付けたことで、目の前の学生に合った進め方を柔軟に考えられるようになったのだと思います。

進め方に正解はない



鎌田美保（愛知県立大学講師）

人物像が浮かび上がる記事を実現する

聞き書きとは何か、いい質問とは？

〈有名な野球選手への質問を例に〉

NG例

- 「あなたにとって野球は何ですか？」
- それを知るために話を聞きに行っているわけで、一言で答えられるわけがない。

改善方法

- できるだけ具体的な質問を複数する。
- 具体的な質問への答えを重ねていくなかで、その人の人物像が臨場感をもって浮かび上がってくる。

授業でのポイント

- インタビューの相手にどれだけ関心をもてるか。
- 初めて会う他人に対して、どれだけ素直に自分がやり出せるか、知りたいことがいっぱいあるかが大切。
- 質問を100個用意する。

インタビュー記事に必要な写真とは？

〈マスク開発者のインタビュー写真を例に〉

NG例

- ただ持っているだけで、マスクの形状もわからない。



改善方法

- マスクをつけてもらって写真を撮る。
- マスクの形状に加え、インタビュー者が何をしている人なのかもよくわかるようにする。

授業でのポイント

記事との関連性を考えて意味のある写真を撮る。

- インタビューでいい写真を撮るには、相手を観察すること、興味をもつことが大切。



感想

- 質問を100個つくるというのは、「何を聞きたいか」の土台づくりとなり、追質問のきっかけになるんじゃないかなと思いました。
- 聞く側と聞かれる側、双方にとって豊かな時間がつくれるようにする、そのためにはその人について「知りたい」と思う気持ちが大切ということを学びました。

- 写真が単なる「記録」から、表現力をもつ「図像テキスト」に変わったような気がします。
- これまでただ「撮ってくるように」と言っていたけれど、ちょっと意識するだけで記事に置いたときの意味合いが変わってくることや、撮る場所の選定も重要ということがわかり、目がうろたわった。



ときめき取材記はこちらから

【事業データ】

ときめき取材記プロジェクト実践ワークショップ

期間：2019/8/24(土)～25(日)、場所：神奈川、講師：塩野米松(作家)、中西祐介(カメラマン)、実践報告：上田安希子(群馬女子大学講師)、三代純平(武蔵野美術大学准教授)、矢部まゆみ(横浜国立大学講師)、義永未央子(大阪大学教授)、参加者：10名

※機関・団体の名称および所属・肩書きは事業実施時のものです。



実践ワークショップ参加後に取り組み、掲載になった記事。



日韓の校長交流

次の交流へと後押し

5年目を迎えた日韓の校長交流プログラム。韓国の校長・教員の招聘と日本の校長・教員の派遣で、双方向に行き来し、二度交流ができる構成になっています。2019年度も11月に韓国から3校9名を東京に招聘し、12月に日本から6校10名をソウルに派遣しました。

それぞれの訪問先で、日本語・韓国語を学ぶ高校生や留学中の大学生、大学関係者と交流し、互いの理解を深めました。2019年度はプログラム後の学校間交流をより進めやすくするために、新たに二つの試みをしました。

まず、韓国の高校の校長に同行する教師の数を1名から2名に増員しました。韓国の学校が日本の学校との交流を推進するためには、外国語や国際交流を担当する教員ばかりでなく、他教科を担当する教員の後押しが重要であることがわかったからです。

そして新たに、過去に本プログラムに参加したことのある学校を対象に

「フォローアップ」事業を始めました。

2回の交流後に事務的な手続きを含めた会合をもつことが、学校間交流の実現に欠かせないからです。今回は12月の派遣プログラムに合わせてフォローアップを実施しました。その結

果、教師交流の話がまとまり、翌月には韓国から教員視察団を受け入れる

学校もありました。学校間交流を進める鍵を握る校長同士、教師同士が繰り返し接することで、交流はより具体的に動き始めるのです。

このプログラムをきっかけに、これまで日韓6組の高校で学校間交流協

定が結ばれているほか、教師や生徒の学校訪問など、それぞれの学校に合った交流が行われています。



2019年度

過去の参加校を対象にフォローアップ事業を開始。学校間交流の具体的な話ができるよう、交流会に1対1の環境を整備。また、韓国からの招聘プログラムにも日本の大学関係者との交流を組み込んだ。

校長交流 2015～2019



2015年度

校長同士交流し理解を深めることが、高校生の交流につながると考え、プログラムを開始。まずは、日本の校長団の韓国への派遣を実施。交流をきっかけに韓国語科目を開設する日本の高校が現れる。



2016年度

校長だけでなく教員も加え、韓国からの招聘と日本からの派遣の構成に。韓国と日本、1年で2度の交流が行えるようになり、校長同士で学校の運営や教育の理念を語り合う対話の機会が倍増。結果、学校間交流協定を締結する高校が続出。



2017年度

昨年度同様、プログラムでは、スーパーで買い物したり、ユースホテルに宿泊したり、生徒の滞在を想定した体験を積む。協定を結んだ学校同士で教員・生徒の行き来が始まる。



2018年度

韓国語を学習した生徒の卒業後の進路として韓国の大学への進学が注目されていることから、日本からの派遣プログラムに、韓国の大学関係者との交流を追加。



生徒が互いに訪問

学校間交流協定を締結

さまざまな形で
学校間交流が実現

ビデオ通話で交流

教師が互いに訪問

繰り返し接したことで 学校間交流が具体化



水口一久（興譲館高等学校教諭）

2018年度に日韓校長交流プログラム、2019年度にフォローアッププログラムに参加しました。12月の訪韓時に、東京での交流会で本校に関心をもってくれた釜山市の大真電気通信高校を訪ねました。大真電気通信高校の先生方は、儒教的な思想を生徒指導に結びつけている本校の教育方針に興味を示していました。一方で本校は、商業系、工業系で専門性を養うキャリアデザインコースを有しており、大真電気通信高校とであれば、将来的に短期留学の受け入れなどもめざせるかもしれないと思ったのです。休日にもかかわらず、多くの先生方が学校を案内くださり、教師交流から始めていこうと話がまとまりました。そして翌2020年1月に10人弱の先生方が本校に視察に訪れました。その後はコロナ禍で、思うように交流が進められない状況ですが、今後オンラインなどでの交流を進めていけたらと考えています。

お互いがどんな交流をしたいのかが初めから明確な場合を除いて、1、2度の会話だけで話をまとめるのは難しいものです。今回会う機会が増えたことで、お互いの意向をくみとりながら話を進めることができました。

異文化交流というと、互いの違うところばかり目を向けて捉えがちです。しかし、違わないところがあることに気づけることこそが異文化交流の醍醐味だと思います。そして「人」と「人」の交流を真剣に行う姿を教師が見せることが、生徒に大きな影響を与えるはずだと感じています。ひとりでも多くの先生に、交流の重要性を体感してもらい、生徒の交流につなげていただきたいと思います。

【事業データ】

韓国の高校校長等招聘

期間：2019/11/21(木)～24(日)、場所：東京、主催：東京韓国教育院、神奈川韓国総合教育院、国際交流基金ソウル日本文化センター、TJF、助成：李熙健韓日交流財団、輸送協力：ANA、旅行取扱：(株)HANATOUR JAPAN、参加者：韓国・京畿道、ソウル、釜山の3校9名(交流会に日本側からは東京、千葉、兵庫、岡山より5校9名参加)

日本の高校校長等派遣

期間：2019/12/26(木)～29(日)、場所：韓国・ソウル、主催：東京韓国教育院、神奈川韓国総合教育院、韓国国際交流財団、国際交流基金ソウル日本文化センター、TJF、輸送協力：ANA、旅行取扱：(株)HANATOUR JAPAN、参加者：東京、千葉、兵庫、岡山より6校10名(交流会に韓国側からは京畿道、ソウル、釜山より6校15名参加)

※機関・団体の名称および所属・肩書きは事業実施時のものです。



日韓の校長交流はこちらから

さまざまな外国語を学ぶきっかけづくりを目的に開催している「隣語講座」。2018年度から、おもに第二外国語の授業を行っている高校の生徒を対象に、英語以外の外国語履修の動機づけを目的とした「高校生のための隣語講座」を実施しています。

2019年度は、9月に東京都立足立西高等学校、10月に東京都立王子総合高等学校、2020年1月に神奈川県立座間総合高等学校の3校で開催しました。そのうち、東京都立足立西高等学校は、「第二外国語科目は開設していないけれど、生徒に英語以外の外国語にふれる機会を与えたい」という先生方の要望に応じて実施したものです。

言語を学ぶために活動するのではなく、活動を行うために言語が必要になるように講座を構成し、さらに活動そのものを楽しめるようにしています。また、その言語でやりとりをする必然性を高めるために、そのことばを第一言語とする方が講師を務めます。

東京都立
足立西高等学校
の場合

2コマで二つの言語の活動を体験できるようにしたため、一つの言語を体験する時間は短くなりましたが、ダンスやゲーム、クイズなどに取り組む生徒たちは楽しそうにことばを口に出していました。

今回、第二外国語が選択必修科目になっている高校、選択科目になっている高校、開設されていない高校と、状況が異なる3校での実施となりましたが、いずれの高校でも70パーセント以上の生徒が、講座後のアンケートに「英語以外の外国語を勉強してみたいと思うようになった」と回答しています。今後もしばへの興味が芽生える体験を提供したいと考えています。



K-POPダンス

韓国語



卓球

中国語



クイズ

スペイン語



「クロワッサンをください」

フランス語



フランス語

ボードゲームDixit

クイズ型クイズ

ドイツ語



フェースペインティング

ドイツ語



生徒に「きっかけ」をつくる意義



加藤泰弘（東京都立足立西高等学校校長）

TJFの他の事業に参加した際に、「隣語講座」について話を聞き、すぐに本校でも開催したいとお願いをしました。足立西高校では第二外国語科目を開設していませんでしたが、国際交流に力を入れており、生徒たちが異文化について知るきっかけになればと考えたためです。その背景には、私自身の経験もありました。高校時代にドイツ語を履修したのですが、英語以外のことばにふれた経験が、大学進学後、そしてさらにその先の人生において、私の視野を広げ、世界への関心を高めてくれたと感じています。生徒たちにも異文化交流の楽しさを知ってほしいという思いがあったのです。

足立西高校には英語学習に熱心な生徒が多いわけではありません。翻すと、生徒は英語に対して「教科」意識が強く、ことばとして捉えることが難しくなっているように感じます。しかしながら、隣語講座をうけているときの生徒たちはとても楽しそうでした。活動のなかで必要なことばを口にする、というのが新鮮だったのでしょう。勉強は得意とはいえない生徒たちが積極的に講座の活動に取り組む姿を見て、大きな手応えを感じました。

すぐに本格的な言語学習につながることは少ないと思いますが、この先の人生で思い出し、文化やことばへの関心につながる経験になったはずだと感じます。終了後に「韓国語の講座を開いてほしい」と言いに来た生徒がいました。教育者として生徒に学びの「きっかけ」をつくる大切さに改めて気づかされました。

【事業データ】

高校生のための隣語講座

【東京都立足立西高等学校】 期日：2019/9/30(木)、主催：TJF、協力：アンスティチュ・フランス東京、インスティトゥ・セルバンテス東京、ゲーテ・インスティトゥート東京、東京韓国教育院、日中学院、講師：徐明煥(韓国語)、ピクトル・ウガルデ(スペイン語)、田村由琴(中国語)、クリスティアン・シュテガー(ドイツ語)、バラタン・ギュー(フランス語)、参加者：1年生(188名)

【東京都立王子総合高等学校】 期日：2019/10/3(木)、主催：TJF、協力：アンスティチュ・フランス東京、インスティトゥ・セルバンテス東京、ゲーテ・インスティトゥート東京、東京韓国教育院、日中学院、講師：イム・ジョンウク(韓国語)、ダビッド・カリオン(スペイン語)、張鈺若(中国語)、クリスティアン・シュテガー(ドイツ語)、バラタン・ギュー(フランス語)、参加者：1年生(231名)

【神奈川県立座間総合高等学校】 期日：2020/1/7(火)、主催：TJF、協力：アンスティチュ・フランス東京、インスティトゥ・セルバンテス東京、ゲーテ・インスティトゥート東京、東京韓国教育院、日中学院、講師：イム・ジョンウク(韓国語)、アイコ・タカハシ・チンチラ(スペイン語)、包略(中国語)、マティアス・フォン・ゲレン(ドイツ語)、丸山智子(ドイツ語)、シリル・コピーニ(フランス語)、クリスティアン・ヨシハラ(ロシア語)、エルネスト・アスタフィエフ(ロシア語)、参加者：1年生(257名)

※機関・団体の名称および所属・肩書きは事業実施時のものです。



高校生のための
隣語講座

はこちらから

写真はすべて©宿野部隆之



TJFが日露交流プログラムを始めたのは、高校ロシア語教育をサポートしたいという思いをもった大学の先生たちとの出会いがきっかけでした。まず「外国語学習のめやす」をベースに「ロシア語教育用学習のめやす」の作成に取り組みました。そして日露で互いの言語を教える教師、学ぶ生徒をつなげたいと考え、2015年にモスクワとノボシビルスクから6名

の日本語教師を招聘。以後、ロシア語・日本語を学ぶ高校生と教師の交流をロシアと日本で交互に行ってきました。日露交流プログラム開始から5年の節目となった2019年度に実施したのは大きく三つのプログラムです。

日本語教育や日露交流を主体的に推進してもらうことを目的に、教育交流会、ロシア語教育実施校の訪問や文化交流ワークショップなどを体験してもらいました。

そして三つ目は、極東地域で開催した日本語教師研修です。極東は非常に広い地域で、散在する教師が集まるだけでも大変ですが、国際交流基金派遣専門家、日露青年交流センター派遣青年教師、現地の日本語教師会など、極東地域における初中等日本語教育の活性化を願う関係者の協力のもと、初の研修会を実現できました。



百聞は一見にしかず

ヴァルヴァラ・フィルソヴァ

(ロシアキリスト教人文アカデミー付属カレッジ日本語教師)

現在本校では42人が日本語を学習していますが、毎年受講希望者が増えています。そのようななか、校長とともに日本を訪れました。校長にとっては初めての日本でした。訪日中、校長は日本の皆さんの礼儀正しさとおもてなしに驚き、日本は最新の技術と伝統的な文化を合わせもった国だという印象をもったようです。最終日に「これまで日本語教師が熱く語る日本について漠然としかイメージできていましたが、今回の訪問で日本語教師と同じ目線になることができました」と感想を語るのを見てうれしく思いました。

帰国後のオープンキャンパスで日本で得た経験を紹介したことで、入学希望者も増えています。本校では現在も日本語の会話クラブや競技かるた大会を定期的に開催していますが、日本語と日本文化の理解を深めるためにますます活発にイベントや交流を行っていきたいと思います。



校長招聘

2019年度

ロシアで日本語教育を行う初中等教育の校長等を招聘



仲間の話が何よりの刺激に

アレクサンドラ・マフラクヴァ

(ハバロフスク5番ギムナジア日本語教師)

極東地域は広いため、教師同士の行き来も少なく、気軽に情報交換を行うのは難しい環境にあると感じています。今回の研修会で、意見交換ができ大変よかったです。違う地域の教師も同じ問題や悩みを抱えていることがわかっただけでも勇気づけられました。また、情報化社会に生きる新しい世代には新しい教え方をすべきだと考える熱心な教師に会ったり、大学生に教える日本語と中学生に教える日本語はかえたほうが良いという仲間と話したりすることができて大きな刺激をうけました。研修会で紹介された教材やグループワークでつくったコースデザインは、一部ですが、自分の授業に取り入れています。



ネットワークの拡張

2019年度

初めて極東地域で教師研修を開催



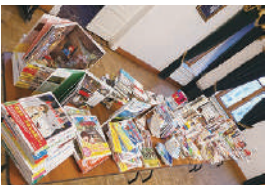
寄贈図書から広がるネットワークと創造性

リャーボヴァ・エカテリーナ

(翻訳家)

マヤコフスキー記念中央公共図書館はサントペテルブルク最大の図書館で、2017年に外国資料課の一部として東洋文化センターが設立されました。TJFの依頼を受け、図書館の日本語蔵書の現状を調べるとともに、図書館の要望を聞きながら、寄贈図書リストをつくりました。センターの日本語資料は人気が高いものの、約1000冊しかなく、特に日本語の教科書や若い学習者向けの本が必要とされていました。そこで、今回の寄贈図書は、①日本語、日本文化の紹介イベントに利用できる本、②子どもから大人まで幅広いニーズに応えられる教材、③若手翻訳者の教育のために利用できる文学作品、という三つの目的で選びました。

贈呈式後には「日本文化理解セミナー」として、若手の日露翻訳者を対象に翻訳を学ぶ機会が設けられました。これは純文学作品の原書の寄贈があって可能になったものです。3月には、第2回のセミナーを開催し、若手翻訳者グループでの共同作業で、日本の童話雑誌『赤い鳥』のアンソロジーを刊行することになりました。ロシア語で日本文学に広くふれてもらうことができるようになり、日本文化・文学への関心が高まると考えています。



図書・教材寄贈

2019年度

日本語の図書・教材を寄贈する「図書館プロジェクト」を実施

2018年度

ロシア語教師と日本語教師の9ペアによる「日露交流学习プロジェクト」中間発表をサントペテルブルクで、最終発表をオンラインで行う

2017年度

日本語を学ぶ中高生と教師の招聘
日露教師合同研修、日露高校生の合同合宿を実施

2016年度

ロシア語を学ぶ高校生と教師の派遣

2015年度

「ロシア語教育用学習のめやす」の作成
日本語教師6名を招聘

生徒交流

教師交流



日露交流はこちらから

【事業データ】

ロシアの初中等校長等招聘

期間：2019/11/1(金)～8(金)、場所：東京、金沢、富山、主催：TJF、助成：(一社)尚友倶楽部、輸送協力：JAL、参加者：ロシア・サントペテルブルク、モスクワ、ノボシビルスクの日本語教育実施校・文化機関の管理職及び日本語教師計17名

図書館プロジェクト

①日本語図書・教材寄贈
期間：2019/4～2020/1、場所：ロシア・サントペテルブルク市マヤコフスキー記念中央公共図書館、助成：(一社)尚友倶楽部、寄贈数：日本語書籍・教材計388点
②日本文化理解セミナー(紙芝居・若手翻訳者セミナー)
期日：2020/1/29(水)、場所：ロシア・サントペテルブルク、主催：マヤコフスキー記念中央公共図書館、共催：TJF、講師：リャーボヴァ・エカテリーナ(翻訳家)、参加者：寄贈式50名、紙芝居8名、翻訳者セミナー11名

極東地域日本語教師研修会

期日：2020/1/25(土)～26(日)、場所：ウラジオストク第2ギムナジア、主催：TJF、共催：ウラジオストク日本語教師会、協力：国際交流基金派遣日本語専門家、講師：フリーク・イリーナ(シベリア・北海道文化センター副館長、シベリア日本語教育協会会長)、ボンダレンコ・オクサーナ(金沢大学、富山県立伏木高等学校ほか非常勤講師)、山崎直樹(関西大学教授)、参加者：極東地域初中等及び大学の日本語教師20名

※機関・団体の名称および所属・肩書きは事業実施時のものです。



くりっくにつぽん

くりっくにつぽん活用術の 実践レポート

Click Nippon News (CNN)は、

おもに小中高校の日本語教師に向けて、日英二言語で月に一回配信しているメルマガです。「くりっくにつぽん」や「ときめき取材記」ウェブサイトのコンテンツを活用し、自分や自文化と比較したり、文化理解や思考力、表現力を深めたりする授業案を紹介しています。

2019年度は、前年度に実施したアンケート調査の結果をふまえ、小中学生向けの活動の紹介を増やしました。特に、算数や美術など他教科につながる活動も入れました。また、CNNの具体的な活用状況を知るためにモニター調査を行いました。

生徒の反応、うまくいかなかった活動とその原因、どんな教材がほしいかなど、具体的にレポートしてもらったことで、リアルな教室の様子を感じ取ることができました。今後、さらに深い学習活動につながるような内容のメルマガを配信していきます。

実践シート

竹田和江 (ニュージーランド・リストンカレッジ日本語教師)

実践した授業案

くりっくにつぽん活用術



絵巻ずしのトピックで算数、アートを取り入れよう

2019年12月配信 (ニコルス潤子氏執筆)

話題/目標: 自分と身近な人びと、行事、食、気持ちや考えを伝え合う、自分・自文化と比べる。
概要: 絵巻ずしに関する視覚教材を使い、絵巻ずしとその作り方を学ぶ。また絵巻ずしをデザインするなど他教科とつながる活動や、絵巻ずしと季節・行事の関係を考えるなど、以下の活動をする。

- ✓ 絵巻ずしについて知る。
- ✓ オリジナルの絵巻ずしを考え絵を描く。
- ✓ 数を数えたり、グラフをつくったりする。
- ✓ 絵巻ずしの作り方について考える。

この授業案を実践した理由

生徒たちが日本語を勉強しながらトピックについてより広い知識を得られる活動がまとまっているから。

生徒の反応

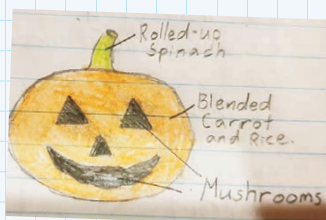
生徒たちがいちばん喜んだのは絵巻ずしの作り方のビデオでした。CNNの手順よりもビデオを先に見せたほうが反応がよかったです。

うまくいかなかった活動とその原因

絵巻ずしに興味をもたせるのに時間がかかりました。日本の年中行事を先に教えてから絵巻ずしについて導入したほうがよかったように思います。

どんな教材がほしいか

この授業のようにいろいろな活動を通して日本文化や日本事情についてより深く理解ができる教材を増やしてください。今回も私自身が絵巻ずしをつくったことがなかったので、CNNの教材がなければ教えていなかったと思います。



活動のなかで生徒たちが考えて描いたオリジナル絵巻ずしのデザイン

【事業データ】

メルマガ「Click Nippon News」配信

配信日：毎月第3木曜日、対象：初中等の日本語教師、読者：約830名

※機関・団体の名称および所属・肩書きは事業実施時のものです。



Click Nippon News (CNN)

バックナンバーと登録はこちらから

『好朋友』から「好朋友日本文化体験の場」へ

2006-2009

第二外国語用日本語教材『好朋友』
全5巻を発行。



2010-2012

『好朋友』を広げるために東北三省（吉林省、黒龍江省、遼寧省）の教育長や中高校の校長を日本に招聘。
東北三省の日本語教師を対象に「好朋友」をテーマにした教師研修を各地で開催。

『好朋友』



大連教育学院とTJFが共同で制作。ストーリー漫画「大連物語」を巻頭に配し、漫画のシーンを使った学習活動を紹介。教育理念として「人間関係の温暖化」と「多文化共生」を掲げている。

2013

第1、2巻の市販化により、中国全土に広がる。

2014

教師用指導書（全2巻）を発行し、全国の教師を対象に「好朋友ワークショップ」を実施。

2015-2018

- ・中国遼寧省・大連市第31中学、上海市工商外国語学校、広東省・中山市外国語学校、華南師範大学附属南沙小学校、黒龍江省・ハルビン市朝鮮族第1中学と協力し、各校に「好朋友日本文化体験の場」を開設。
- ・体験の場を有する学校の教師交流会を実施（2017）。
- ・体験の場を有する中高校と大連市内の中高校の教師を対象に「プロジェクト型学習」の研修、生徒の成果発表会「わたしたちの学校の制服デザイン」を実施（2018）。



中山市外国語学校の体験の場。教室の内装工事が大掛かりに行われた。



好朋友



『好朋友』がめざした 学びの実現に向けて

TJFが2009年に大連教育学院と共同で制作した第二外国語教育用教材『好朋友』は教師研修を通して徐々に全国に広がっていききました。そして2015年からは、中国各地の学校の協力を得て生徒たちが日本文化を体験できる「好朋友日本文化体験の場」（以下、体験の場）をつくり、それぞれの状況に合わせて体験の場を活用してもらえようというサポートを行ってきました。

「文化をどう捉えるか」知識から視点の獲得へ

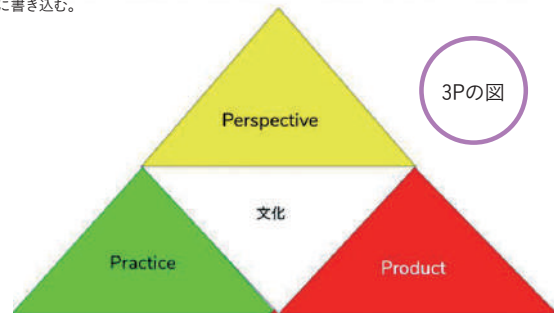
TJFでは体験の場を有する学校の教師を中心に、研修やプロジェクト型学習を取り入れた授業のサポートなどを行ってきました。そのなかで「文化を扱った活動や授業の組み立て方がわからない」「生徒のどんな学びにつながるのかわからない」という声が多く聞かれました。

そこで2019年度は、文化を見る視点の獲得を目標に設定し、東京・上海で教師研修を行いました。日本や日本文化を「知識」として紹介するだけでなく、文化について、その理由や背景にあるものを生徒に考えさせることで、思考力や対話力の向上につながります。それを体験的に知ってもらうことをめざしました。

まず7月に稲原教子・元アメリカンスクールインジャパン教諭と中国の



東京の街中で買ったものや見たものの3Pを考えて付箋紙に書き込む。



日本語教育に長年関わっている武田育恵・華南師範大学附属南沙中学日本語教師を講師に迎え、「文化の捉え方」をテーマに体験型の教師研修を実施しました。講義では、「文化」から連想するものを挙げていき、改めて文化とは何かについてみんなで考えた後、文化を捉える方法として、Product（そのもの、産物）・Practice（方法、習慣）・Perspective（なぜ、物の見方）の3つのPを使った考え方が紹介されました。Perspectiveには決まった答えはなく、いろいろな視点から「なぜ」を考えるものです。「名刺」を例にとると、Productは「名刺」、Practiceは「名前や連絡先が書いてあり、ビジネスなどで交換するもの」、Perspectiveは、「名前が一度で覚えられないから」「連絡先を残すため」「名前を忘れてしまったら失礼だから」などです。さまざま「なぜ」を考えることで、ステレオタイプに陥らないようにしたり、思考を深めたりすることができます。

講義後は、体験の場に置きたいものを買うに出かけました。ここでのミッションは、買ったものを3Pで説明する動画をつくること。翌日はそれぞれが買ったものと動画を見せ、みんなで見え出し合いました。

最終日には、グループに分かれ生徒に3Pを考えさせる模擬授業を行い

ました。あるグループはご祝儀袋を例にとり、「これは何をするものだと思う？」「どう使うの？」と考えさせる時間を多く取った授業を行いました。模擬授業で教師側、生徒側の役割を体験したことで、ふだんすぐに答えを言うてしまったり、生徒が考える時間を十分にとっていないかったりしたことに気づいたようです。

上海研修

10月にはフォローアップとして、東京研修の参加者に上海に再集合してもらい、2日間の研修を行いました。前回に引き続き、稲原氏と武田氏が講師を務めました。東京研修後に実践できたことや感じたこと、実践に向けて



さまざまなご祝儀袋を使って模擬授業を行った。

より具体的なニーズと悩みを共有して、講師と参加者が一緒にアイデアを出し合いました。また、教科書を使って文化を取り入れた授業をどのようにするのか知りたいという要望があり、稲原氏が教科書の読解文を使って、そこに出てくる文化要素をどう取り上げるかについて話しました。

その後、参加者は実際に読解文から文化要素をピックアップし、そこから問題をつくってみました。その際、読解力を高めるポイントも紹介されまし

た。読解文からでも3Pを考えさせることができ、思考力を高められること、その力は将来につながると稲原氏は語りました。

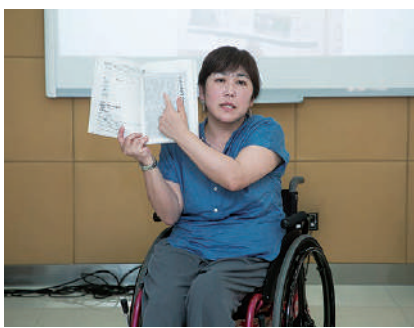
体験の場を活用するために

11月から12月にかけて、各校に合わせた体験の場の活用と実践方法を具体的に現地の教師と一緒に検討することを目的に、武田氏が体験の場を巡回訪問しました。

外部講師を招き、お茶や浴衣の着付け体験を生徒にさせたり、本を生徒に貸し出したりするなど、活用例もありましたが、飾られているだけで使われていないものもあることがわかりました。使っていない理由



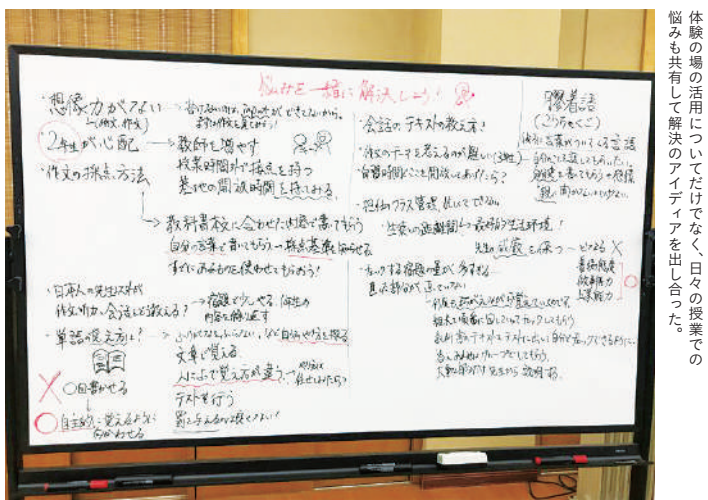
授業で使っている教科書にも、文化要素があることを説明する武田氏(左から2番目)。



読解文の問題を作成するときのポイントを説明する稲原氏。

としては、使い方がわからないものもあれば、自由に見たり触ったりすることで壊れることを恐れているケースもありました。実際に使うことが生徒の興味や意欲向上につながるから、使ってもらうために工夫することが重要です。武田氏は体験の場の開放時間を設けたりするなどのアイデアを紹介しました。また、生徒に体験させるだけで終わってしまっている例もあり、武田氏から、体験が生徒のどんな学びにつながるのかを考えながら授業を組み立てることが重要だと話がありました。その後実際にどのようにできるのかを考えました。

東京・上海研修に参加した教師からは、生徒に「なぜ」を考えさせたり、絵や写真から問題文をつくったりするなど、東京・上海研修で得たことをいかしているという報告もありました。巡回訪問時に、大連とハルビンでは体験の場を有する学校だけでなく周辺の学校の日本語教師も対象にした研修も実施しました。3Pの考え方を文化の捉え方や授業での取り入れ方をテーマに取り上げ、武田氏が講師を務めました。



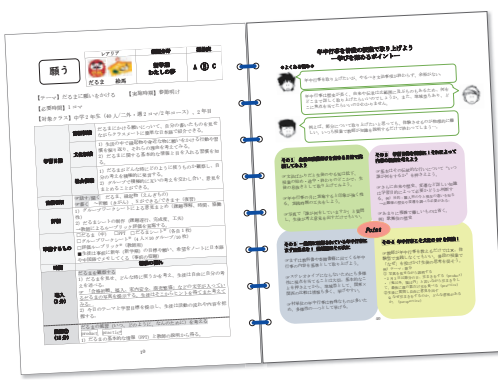
体験の場の活用についてだけでなく、日々の授業での悩みも共有して解決のアイデアを出し合った。

体験の場のさらなる活用に向けて

2019年度に実施した東京・上海研修で取り上げられた文化の捉え方をふまえ、体験の場を活用するヒントやアイデアをまとめることが体験の場のさらなる活用につながると考え、武田氏の協力を得て『好朋友日本文化体験の場 活用アイデア集』を作成しました。体験の場にあるものを実物教材（レリア）として使った



『好朋友日本文化体験の場 活用アイデア集』



実践アイデア、年間行事に合わせた活動案、文化を取り入れることの意義・生徒の学び・教師の姿勢などこれまでの研修で取り上げてきたこともまとめられています。アイデア集は2020年に体験の場を有する学校の教師に送付されました。

体験の場が生んだ広がり

王佳・上海市工商外国語学校日本語教師が、「上海市中等職業学校ビジネス日本語研究室」を2020年1月に立ち上げ、教師向けの講座を多く開催しています。現在開講中の全8回のオンライン講座では、武田氏が講師を務め、ほかの学校の体験の場の教師にも幅広く参加を呼びかけています。体験の場を通じてできたネットワークがさらに広がっています。

『好朋友』に込められているのは、中国で日本語を学ぶ生徒たちに、身近な人をはじめ、さまざまな文化背景をもつ人びとと関係を築いていってほしいという願いです。生徒たちが固定観念や偏見にしばられず、広い視野で文化を捉え、思考力を深めていけるように、各地の体験の場が、それぞれの実情に合わせて柔軟に活用されていくことが期待されます。

教師の感想

実践アイデアは話題分野と難易度が書かれているので、生徒たちのレベルを考えながら教科書の内容と結びつけることができます。体験の場にあるレリアを活用することで生徒たちの学習意欲を高め、生徒自身に「なぜ」に気づいてもらうことができます。活動の流れも丁寧に説明されているので活用しやすいです。

張洗（上海市工商外国語学校日本語教師）

月/年中・学校行事 (キーワード)	活動事例と活用レリア (＝体験の場にあるレリア)	生徒が考える 文化の3P「なぜ」の例
2月 節分(鬼、豆まき、恵方巻) 初年(はつまつ) バレンタインデー	【豆まきを体験しよう】『鬼のお面(あったら、手作りもOK)』 節分の風習に関する文章に触れたり、事前に調べてきて基本的なことを理解する。鬼役と豆をまく役に分かれ、鬼役は手作りのお面をかぶり、豆をまく人は「鬼は外、福は内」と言って鬼に向かって豆まきを体験する。 【バレンタインデーで〇〇チョコ】バレンタインデーに女性が男性にチョコを贈る習慣があるのを確認した上で、「本命チョコ」「義理チョコ」「友チョコ」などさまざまな社会背景を考えてみる。また、自分なら「〇〇チョコ」がほしいか考えて話す。	・なぜ鬼が登場するのか、鬼の意味は何か ・なぜ豆をまくのか。豆にはどんな意味があるのか ・なぜチョコを贈るのか ・「友チョコ」など近年のバレンタインデーの変化が見られるのはなぜか
3月 雛祭り(雛人形、桃の節句、雛あられ)、 ホワイトデー、引越 し、お彼岸、卒業 式 国際婦人デー	【雛人形を飾ってみよう】『雛人形(あったら、書籍『簡単折り紙大百科』) ・雛祭りに体験の場にしまっている雛人形を出して、生徒自身が飾ってみる。 飾る位置、装飾品などに考慮しながら飾る。お雛様とお内裏様以外の人形は写真やビデオで見て、その様子を観察し、雛人形を飾る習慣や背景について考えてみる。 ・雛人形がない場合、折り紙で雛人形を折る体験をする。 【引越越しシーズン】 3月は引越越しシーズンであることに触れ、日本の賃貸アパートの広告やチラシを見て、専門用語に触れながら部屋の情報を読み取ってみる。(広告やチラシはネットから得る) また、自分が住んでみたい部屋について作文を書いたり、話したりする。	・なぜ毎年雛人形をしまう習慣があるのか ・雛人形の装飾はなぜこんなに複雑で華やかか ・なぜ3月が引越越しシーズンなのか ・日本の賃貸アパートの特徴は何だと思 うか ・自分が住んでみたい部屋はどんな部屋か (大きさ、間取り、向き、安全、利便性など)
4月 お花見(桜、お弁当) 入学式、新学期、新 〇年生、新入生歓迎 会 エイブルプール	【桜の魅力を考えよう】『写真集『日本の美しい里』『日本絶景レット』 百人一首 ・日本で4月に桜が咲いたり、桜前線のニュースやお花見を実施する風習に触れて、なぜ日本ではこんなに桜のイメージが多いのかを考えてみる。 ・百人一首から桜が出てくる歌を挙げ、読んだり書いたりしてみる。桜をキーワードに短歌や俳句、川柳などを作ってみてもいい。 【日本の学校を体験しよう】『制服、教科書 日本では4月に学校がスタートするので日本の学校生活について学ぶ。制服を体験したり、時間割を観察し、学ぶ教科や内容について把握したり、自分の学校と比べて共通点や相違点について	・桜から何をイメージするか ・なぜ4月に桜を思い浮かべたり、花見に行くのか ・桜の魅力は何だと思 うか ・なぜ制服がある学校が多いのか、制服のメリットやデメリットは何だと思 うか ・時間割、教科書を見て感じたことや気づ

活用アイデア集の一部。短い時間でも簡単に文化を取り上げられるように、年中行事と活動の場にあるレリアをリンクさせたリストも掲載。



好朋友
文化体験の場

はこちらから

『好朋友』と共に10年 物語は次の展開へ



武田育恵（華南師範大学附属南沙中学日本語教師）

この10年、『好朋友』と共に歩んだ日々であった。2019年度に研修会と体験の場の巡回を終えた今、「人間関係の温暖化」「多文化共生」はこれからが真のスタートだと期待している。

『好朋友』が発行された頃、日本語が一外(第一外国語)から二外(第二外国語)にシフトし、自信を失っていた教師もいた。そんななかで『好朋友』の理念や目標は二外の指針となり、本教材の学習活動や文化の題材は、授業づくりのよりどころにもなっていた。一方で、「生徒が教えたことを覚えてくれない」「生徒がやる気がない」といった声も聞かれた。中国の教育現場は受験至上主義で、教師は日本語を知識として教え、生徒は暗記する。社会や文化と結びつかず、ことばや場面をイメージしたり考えたりする学びが不足していたのである。

2019年の東京研修では文化をテーマに挙げた。文化を知識として教えている教師にとって「文化の捉え方」は新たな気づきであったことだろう。「意外に自分がステレオタイプだった」「文化をどう教えるかやっとわかった気がする」——教師歴20年以上のベテラン教師のことばだった。巡回研修では、大連市日本語教員員の楊慧さんが「好朋友の編集委員会で中野さん(中野佳代子氏・当時TJF事務局長)や加納先生(加納陸人氏、当時文教大学教授・編集委員長)がおっしゃったことばの意味がようやくわ

かった」とメッセージをくれた。時間がかかったが、『好朋友』の理念や文化の学びに先生たちがやっとたどり着いたような気がした。

教師は一外から二外の転換で『好朋友』という新しい教材と向き合い、限られた時間で意義のある学びは何かを考え実践してきた。二外でゴールを自分で考え、「何のために日本語を教えるのか」という核心的な問題と向き合い続けてきたからこそ“そのことば”が実感として湧き出たのではないだろうか。また、中国の教育全



体の社会的場面で発揮されることが明示された。まさに、『好朋友』の理念と目標と重なる部分である。改めて、『好朋友』の理念や文化の学びが投げかけたものは大きかったと感じている。

『好朋友』の漫画ストーリーと同様、私にとって出会いと学びにあふれたかけがえのない10年間であった。編集メンバーの方々が『好朋友』に込めた想いを紡いでこられただろうが……。10年間ではまだまだである。文化と言語のバランスや授業展開の工夫など多くの課題も残っている。次の10年、「体験の場」に寄り添いながらまた新たなストーリーを描いていきたい。



体験の場は大変役に立ちます。しかし、高校の授業は扱う内容が多いため、文化体験を取り入れる時間が足りないのが実状です。どう調整していくかは日本語教師に共通の悩みです。私は授業中生徒が疲れたときや年中行事を取り上げるときに少しずつ文化体験を取り入れるようにしています。

生徒の学習意欲だけでなく 教師の指導意欲も高めた『好朋友』



朴英姫（ハルビン市朝鮮族第一中学校日本語教師）

初めて『好朋友』に出会ったのは2012年のことでした。私たちが使っていた教科書とは違って、生徒たちが大好きな漫画があって、私も興味をもちました。その後、本校も第二外国語の教材として『好朋友』を使うようになりました。生徒からはもちろん、教師からも評判がよかったです。内容の面はいうまでもなく、教師たちがふだんの授業で使いやすいように書かれていたのです。日本語文法だけではなく、異文化にもふれることができるなんて素晴らしいと思いましたが、今もそう思います。

現在、本校に「好朋友日本文化体験の場」もできて、生徒たちは実際に文化体験ができ、喜んでいきます。生徒は以前よりも興味深く日本語を勉強しています。中国で現在使われている日本語教科書も、『好朋友』も生徒の異文化理解力を養うことを目標にしている点で同じなので、

TJFを支援してくださっている方々

TJF は皆さまからご協力、ご支援をいただき事業を行っています。
2019、2020 年度も下記の皆さまに支えていただきながら事業を進めました。
改めましてお礼を申し上げます。

賛助会員

〔法人〕

2019年度

王子製紙(株) 鹿島建設(株) 春日製紙工業(株) 共同印刷(株) キングレコード(株) (株)廣済堂
(株)講談社ビジネスパートナーズ (株)光文社 (株)国宝社 (株)世界思想社教学社 第一紙業(株) (株)第一通信社
大日本印刷(株) (株)電通 (株)トーハン 図書印刷(株) 凸版印刷(株) 豊国印刷(株) 日興紙業(株)
日本出版販売(株) 日本製紙(株) 日本図書普及(株) (株)フォーネット社 富士ゼロックス東京(株) 二葉製本(株)
北越コーポレーション(株) 丸王製紙(株) 丸住製紙(株) 丸紅紙パルプ販売(株) (株)三井住友銀行 三菱製紙販売(株)
(株)三菱 UFJ 銀行 (株)彌生

2020年度

王子製紙(株) 鹿島建設(株) 共同印刷(株) キングレコード(株) (株)廣済堂 (株)講談社ビジネスパートナーズ
(株)光文社 (株)国宝社 (株)世界思想社教学社 第一紙業(株) (株)第一通信社 大日本印刷(株) 高尾丸王製紙(株)
(株)電通 (株)トーハン 図書印刷(株) 凸版印刷(株) 豊国印刷(株) 日興紙業(株) 日本出版販売(株) 日本製紙(株)
日本図書普及(株) (株)フォーネット社 富士ゼロックス東京(株) 二葉製本(株) 北越コーポレーション(株)
丸住製紙(株) 丸紅紙パルプ販売(株) (株)三井住友銀行 (株)三菱 UFJ 銀行 (株)彌生

〔個人〕

2019年度

石井恵理子 石井誠 市原徳郎 カイト由利子 高崎孝 高嶋伸和 細谷美代子 松井外恵 匿名希望 1 名

2020年度

石井恵理子 石井誠 市原徳郎 カイト由利子 高崎孝 高嶋伸和 細谷美代子 松井外恵 匿名希望 1 名

助成団体

2019年度

(一社)尚友倶楽部 (公財)日韓文化交流基金 (公財)三菱 UFJ 国際財団 李熙健韓日交流財団

2020年度

(一社)尚友倶楽部 (公財)東京しごと財団

寄付者

2019年度

(株)講談社 石塚誠 内田恵孝 及川伊佐子 何美津子 桑原公男 祭貴貴美子 佐野実 佐藤篤 佐藤宏子 菅陽子
西堀勝仁 (株) HANATOUR JAPAN 松尾雅弘 三田崇文 森本美佐子 匿名希望 5 名

2020年度

(株)講談社 上松功二郎 上村圭介 内田恵孝 小田桐奈美 小出和彦 胡興智 小沢教材研究チーム 千場由美子
長沼美奈子 前田とまき 匿名希望 1 名

(敬称略 五十音順 2021 年 1 月末現在)

組織

評議員会 任期：一期 4 年	評議員会長	
	野間 省伸	(株) 講談社代表取締役社長
	評議員	
	足立 直樹	凸版印刷 (株) 特別相談役
	北島 義斉	大日本印刷 (株) 代表取締役社長
	豊泉 俊郎	三菱 UFJ 証券ホールディングス (株) 特別顧問
	長瀬 眞	三菱地所 (株) 社外取締役
	馬城 文雄	日本製紙 (株) 取締役会長
	森平 高行	王子製紙 (株) 代表取締役社長
理事会 任期：一期 2 年	山根 隆	(株) 講談社顧問
	理事長	
	渡邊 幸治 *	元駐ロシア特命全権大使
	常務理事 (常勤)	
	水口 景子 *	
	業務執行理事 (常勤)	
	鈴木 律子	(公財) 国際文化フォーラム事務局長
	理事	
	上野 田鶴子	特定非営利活動法人日本語教育研究所理事
監事 任期：一期 2 年	金丸 徳雄	(株) 講談社専務取締役
	輿水 優	東京外国語大学名誉教授
	境 一三	慶應義塾大学経済学部教授
	佐藤 郡衛	明治大学国際日本学部特任教授
顧問 任期：一期 2 年		
	安西 浩和	日本出版販売 (株) 取締役副社長
	北島 義俊	大日本印刷 (株) 代表取締役会長
	鈴木 孝夫	慶應義塾大学名誉教授 ※ 2021年 2月10日ご逝去
	田仲 幹弘	(株) トーハン取締役副社長
	福島 一守	日本製紙 (株) 専務執行役員印刷用紙営業本部長
	鮑 啓東	(一社) 日本人材派遣協会元副会长
	吉田 研作	上智大学教授

(敬称略 五十音順 2021 年 1 月末現在)

2019年度実施事業一覧

事業名	主催ほか関係機関	場所	期日・期間
好朋友日本文化体験の場			
中国日本語教師東京研修	助成：(公財) 三菱 UFJ 国際財団	東京	2019/7/25 ～ 30
日本語教師フォローアップ研修	助成：(公財) 三菱 UFJ 国際財団、会場協力：上海市工商外国語学校	中国・上海	2019/10/10 ～ 13
好朋友日本文化体験の場巡回訪問	助成：(公財) 三菱 UFJ 国際財団	①中国・大連 ②中国・ハルビン ③中国・上海 ④中国・中山	① 2019/11/5 ～ 8 ② 2019/11/26 ～ 29 ③ 2019/11/29 ～ 30 ④ 2019/12/5 ～ 8
「外国語学習のめやす」ワークショップ in 大連	主催：大連理工大学、共催：Let's めやす、TJF	中国・大連	2019/8/2
日韓のことを学ぶ中高生交流プログラム「SEOUL でダンス・ダンス・ダンス 2019」	企画・主催：(財) 秀林文化財団、TJF、実施：秀林外語専門学校、韓国日本語教育研究会、TJF、助成：(公財) 日韓文化交流基金、協力：高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク (JAKEHS)、輸送協力：ANA、後援：国際交流基金ソウル日本文化センター、旅行取扱：(株) HANATOUR JAPAN	韓国・ソウル	2019/8/14 ～ 19
学びの探究とデザイン			
「探究する学び」あれこれ相談☆オンラインカフェ		オンライン	2019/8/19
教育しか残せな時代に—知識と実体験を融合する鹿児島「サバイバル理科」の取り組み		東京	2019/11/10
探究する学びに踏み出そう—実践の分析とデザイン	主催：探究 スキル 研究 プロジェクト、TJF、助成：JSPS 科 研 費 19K03009	オンライン	2020/3/15
ときめき取材記プロジェクト実践ワークショップ		神奈川	2019/8/24 ～ 25
高校生のための隣語講座			
東京都立足立西高等学校	協力：アンスティチュ・フランセ東京、インスティトゥ・セルバンテス東京、ゲーテ・インスティトゥート東京、東京韓国教育院、日中学院	東京	2019/9/30
東京都立王子総合高等学校	協力：アンスティチュ・フランセ東京、インスティトゥ・セルバンテス東京、ゲーテ・インスティトゥート東京、東京韓国教育院、日中学院	東京	2019/10/3
神奈川県立座間総合高等学校	協力：アンスティチュ・フランセ東京、インスティトゥ・セルバンテス東京、ゲーテ・インスティトゥート東京、東京韓国教育院、日中学院	神奈川	2020/1/7
日露交流			
日本語図書寄贈・教材寄贈	助成：(一社) 尚友倶楽部	ロシア・サンクトペテルブルク	2019/4 ～ 2020/1
ロシアの初中等校長等招聘	助成：(一社) 尚友倶楽部、輸送協力：JAL	東京、金沢、富山	2019/11/1 ～ 8
極東地域日本語教師研修会	共催：ウラジオストク日本語教師会、協力：国際交流基金派遣日本語専門家	ロシア・ウラジオストク	2020/1/25 ～ 26
日本文化理解セミナー	主催：マヤコフスキー記念中央公共図書館、共催：TJF	ロシア・サンクトペテルブルク	2020/1/29
学校のソトでうでだめし			
しょうがないを乗り越えろ！ 構造を理解し解決を配置するシステム思考実践—ゴミ拾いで稼ぐには		東京	2019/11/9
日韓校長交流			
韓国の高校校長等招聘	主催：東京韓国教育院、神奈川韓国総合教育院、国際交流基金ソウル日本文化センター、TJF、助成：李熙健韓日交流財団、輸送協力：ANA、旅行取扱：(株) HANATOUR JAPAN	東京	2019/11/21 ～ 24
日本の高校校長等派遣	主催：東京韓国教育院、神奈川韓国総合教育院、韓国国際交流財団、国際交流基金ソウル日本文化センター、TJF、輸送協力：ANA、旅行取扱：(株) HANATOUR JAPAN	韓国・ソウル	2019/12/26 ～ 29

※各事業の詳細につきましては、P4～34の該当ページおよびTJFウェブサイト (www.tjf.or.jp) の事業紹介をご覧ください。





国際文化フォーラム事業報告

CoReCa 2019-2020

2021年3月発行

デザイン 山本義明 (goldfish design)
編集協力 古賀亜未子 (エスクリプト)
印刷・製本 凸版印刷株式会社

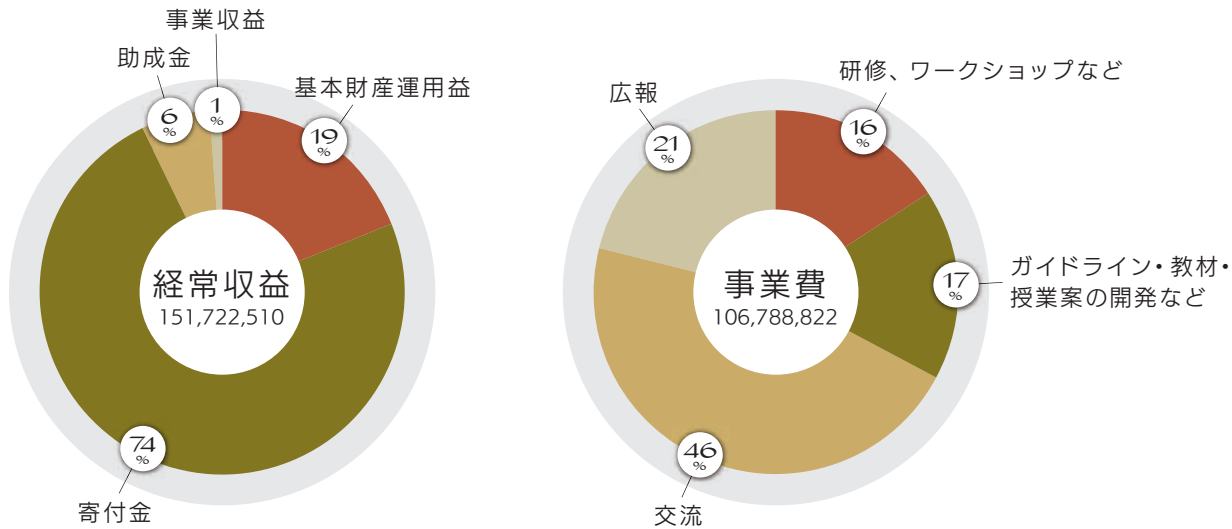
編集・発行 (公財) 国際文化フォーラム

〒112-0013
東京都文京区音羽 1-17-14 音羽YKビル 3F
Tel 03-5981-5226
Fax 03-5981-5227
Email forum@tjf.or.jp
URL www.tjf.or.jp
Facebook www.facebook.com/TheJapanForum

ISSN 2189-6208
©2021 by the Japan Forum, Printed in Japan
「CoReCa」は(公財)国際文化フォーラムの登録商標です。

財団概要

設立	1987年6月22日 2011年4月1日、公益財団法人に移行
出捐企業	王子製紙株式会社 株式会社講談社 大日本印刷株式会社 凸版印刷株式会社 日本製紙株式会社 株式会社三菱 UFJ 銀行
基本財産	20億円
財政規模	2019年度の経常収益は約1億5,172万円、事業費は約1億679万円でした。 内訳は以下の通りです。



サポートのお願い

さまざまなことばや文化の学び、交流を通じて、子どもたちが21世紀を生きぬく力を育むことがTJFのミッションです。このミッションを達成するために、共感していただける方々に次のようなご支援をお願いしております。

- ▶ **寄付** TJFの活動全体に対する寄付、特定の事業を指定する寄付があります。
- ▶ **賛助会員** 継続的な支援をしていただける方に賛助会員になっていただいています。
年会費：〔法人会員一口〕50,000円
〔個人会員一口〕10,000円

寄付金につきましては、税制上の優遇措置が適用され、所得税や法人税の控除を受けることができます。さらに、個人寄付者の皆さまには確定申告の際、減税効果の高い「税額控除方式」を選択していただけます。ご支援くださる方々には、TJFが発行する印刷物を送付するほか、TJFが主催するイベントのご案内を差し上げています。

詳しくはこちらから▶



